SANRIKU × ASIA

三陸×アジア

地域を元気にするこころと文化の行き交い

ASIA center JAPANFOUNDATION

三陸×アジア

地域を元気にする
こころと文化の行き交い

SANRIKU×ASIA

海や山といった
豊かな自然と
それらに寄り添う人々の
暮らしと文化。
それが「三陸」にあります。

その三陸と
アジアの各地の間で
さまざまな交流が
生まれました——。

人々が、一歩前へと進んだり
地域や自分の未来を描く
きっかけになったり
こころと文化の行き交いが
地域を元気にしています。

CONTENTS

CHAPTER 0
国際交流はなぜ大切？ 10
国際交流って何だろう？ 12

CHAPTER 1
僕たちは海を越えて交流した 16
関係性こそが国を越えるドア！ Ⓓ 18
世界と響き合う〝郷土芸能〟 Ⓢ 24
国際交流の始まり❶ 26
〝誰でも歓迎〟から海外への扉が開かれた
国際交流の始まり❷ 28
〝おもてなしをされる〟から〝習いに行く〟へ
防災の知恵を伝える楽しい方法 Ⓗ 30
「人のやさしさ」に触れた三陸縦断600㎞の旅 Ⓗ 32
東北とアチェ。 36
被災地間の〝国境〟と〝世代〟を越えた循環
寄稿【私の見た東北】 38
被災地を照らす光　アジズ・アリ・ダード

CHAPTER 2
今も続く、国際交流 40
南三陸町に帰郷。「鹿子躍」を発信！ Ⓢ 42
「僕らが伝承する」。若者の決意と覚悟 Ⓢ 44
私、フェローから「防災活動家」になりました。 Ⓗ 46
News!!
今もなお広がるDOOR to ASIAの輪 Ⓓ 48
01 石渡商店の挑戦！ 海外展開へ 48
02 箱根山フェスティバル 50
03 7社のプロジェクトが進行中！ 52
04 フィリピンや奈良など他地域でも開催！ 52
アートと大好きな陸前高田の未来 53
寄稿【私の見た東北】
ポスト3・11の東北への旅
復興と再起の実態　ラム・ペンエ 54

アジアセンター 三陸での取り組み 56
「三陸×アジア」つながるプロジェクト 58
DOOR to ASIA 60
HANDs！プロジェクト 66
Sanriku-Asian Network Project 72
東北とアチェの被災地間交流 78
アーティスト・イン・レジデンスの取り組み 80

【マークの見方】このブックレットでは、左記のプロジェクトを中心に紹介しています。プロジェクト別に内容を知りたい場合、マークのついたページをご覧ください。また、P56以降でも各プロジェクトについて紹介しています。

Ⓓ＝DOOR to ASIA
Ⓢ＝三陸国際芸術祭〝Sanriku-Asian Network Project
Ⓗ＝HANDs！プロジェクト

CHAPTER 0

国際交流はなぜ大切？

地域での国際交流はなぜ大切なのでしょうか？
東日本大震災により被災した三陸で
交流が果たす意義や、国際交流が何なのかについて考えました。

国際交流って何だろう？

三陸とアジア。「文化」を通じた交流には、どのような意義や可能性があるのでしょうか。『国際交流基金アジアセンター』などが主催する「三陸国際芸術祭」（サンフェス）の生みの親である佐東範一さんと、同芸術祭の推進委員会委員長である中村一郎さん、『国際交流基金』の柄博子の三人で語りました。

聞き手＝鈴木勉（国際交流基金アジアセンター）　文＝近藤快

三陸とアジアをつなげたい

――まず、三人の経歴や、三陸とアジアに関する活動について紹介していただけますか。

佐東範一さん（以下、佐東） 2001年に「社会とダンスをつなぐ」を理念に『NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク（JCDN）』を立ち上げ、日本各地でダンスの普及活動などを行ってきました。東日本大震災後は、ダンスアーティストが三陸の郷土芸能を習いに行く活動を開始し、その後2014年から三陸とアジア各国の芸能による交流をコンセプトにした「三陸国際芸術祭」を開催しています。

中村一郎さん（以下、中村） 岩手県職員として、震災後は復興局長を務めるなど、ほぼ一貫して復興に関連する仕事に携わってきました。そして、2016年に県を退職した後、『三陸鉄道株式会社』の社長に就任しました。

今強く感じているのは、三陸沿岸地域に住む人同士を〝つなげる〟ことの重要性です。2019年3月23日に、『三陸鉄道』は盛駅（岩手県大船渡市）から久慈駅（岩手県久慈市）までが「三陸鉄道リアス線」として一本につながりました。ただ単に列車で人を運ぶだけではなく、人をつなげて交流を促し、地域を元気にする必要があります。

「三陸国際芸術祭」を盛り上げることは、三陸全体の復興を考えたときに大きな力になるはずです。そんな思いで、推進委員会の委員長を引き受けさせていただきました（P45参照）。

柄博子（以下、柄） 「三陸国際芸術祭」には2015年から参画し、同時に三陸とアジアの芸能団体が交流する「Sanriku-Asian Network Project（サンプロ）」に年間を通して取り組んでいます。佐東さんの「三陸とアジアをつなげたい」という思いに強く共感したのです。三陸の「内」だけではなく、「外」の刺激が入ることで新しいものが生まれる。そうした動きに、役に立てるのではないか。そう思って、活動を続けています。

交流で生まれた変化

――佐東さんは「三陸国際芸術祭」を開催する際、なぜアジアに着目したのでしょうか。

佐東 三陸の郷土芸能を見聞きしたり習ったりするなかで、「これはアジアだな」とピンときたんです。私はこれまでもアジア各国の芸能を見てきましたが、共通点が多いんですよ。例えば、どちらも踊り手は普段は仕事をしながら、週末などに練習をしています。また、芸能そのものも、どちらも宗教性を帯びていたりします。国や言語は違いますが、根っこの部分は同じなんですね。

ですから、芸術祭は三陸だけにとどめるのではなく、アジア全体に開く方法があるのではないか。そんな思いからこの芸術祭を着想し、同時に、三陸の芸能をアジアに向けて発信することだけではなく、アジアの芸能団体を三陸に招くことも大事にしました。共通点の多い芸能を入口にすれば、互いに交流が深まると考えたからです。

――実際に三陸とアジアの芸能団体が交流をすることで、どのような変化が生まれているのでしょう。

柄 例えば、高校生たちがアジアの芸能に間近で接したことで、自分たちがやっている郷土芸能の将来を、さらに真剣に考

●**柄博子（つかひろこ）**／『独立行政法人国際交流基金』理事
東京外国語大学卒業。1981年、『国際交流基金』に入り、メキシコ駐在員事務所長、文化事業部長兼情報センター部長、総務部長、統括役執行委員兼企画部長などを歴任し、2015年4月より現職。

●**中村一郎（なかむらいちろう）**／『三陸鉄道株式会社』代表取締役社長　岩手県盛岡市出身。1979年、岩手県入庁。東日本大震災後は、政策地域部長や復興局長を歴任し、2016年3月に退職。同年6月、『三陸鉄道』の社長に就任。「三陸国際芸術推進委員会」の発起人の一人で、委員長を務める。

●佐東範一（さとうのりかず）／『NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク（JCDN）』理事長　1980年から、舞踏カンパニー『白虎社』で舞踏手兼制作者として活動。2001年、『NPO法人JCDN』を設立。震災後にダンサーが郷土芸能を習う「習いに行くぜ！東北へ！」を開始し、その後「三陸国際芸術祭」を立ち上げた。

えるようになっています。

その高校生たちが見たアジアの芸能は、観光客にも人気があります。その光景に接した彼らが、「自分たちも、もっと外の人にアピールしないといけないのではないか」などと口にするようになったんです。アジアの芸能に触れる、つまり国際文化交流をすることで、それまでは考えていなかったような新たな気づきや発見が生まれてくるわけです。

佐東　こんな例もあります。日本や三陸の芸能団体の間では、昔から活動している長老たちが子どもを指導するのが一般的だと伺っていました。でも、インドネシアで活動するあるグループは、高校生が中学生に、中学生が小学生に、といった具合に一世代上の人が教えていました。それを知った人が「こんな風に若い人を育てる方法もあるのか、と勉強になった」と言っていましたよ。郷土芸能を伝承していく方法論の違いですね。

これは、三陸の芸能を未来につないでいくうえで一つの参考になったのではないかと思います。

中村　国際交流の影響は大きいですよね。岩手県宮古市に本拠を置く「黒森神楽」も、いい例の一つだと思います。

「黒森神楽」は震災後、海外公演を行う機会が増えたそうです。参加した高校生たちに話を聞くと、「行ってよかった」「勉強になった」「今までよりも、芸能について深く考えるようになった」と話していました。自分たちの存在を全く知らない海外の人たちに披露するわけですから、まずは自分たちがその芸能について深く理解しないと、観客に魅力を伝えることはできませんよね。

地元だけの閉じた空間にいると、活動はどうしても〝前年の繰り返し〟のようなかたちになってしまいがちです。ただ、外に開くことで自分たちの活動のあり方をあらためて考えるようになり、「これからは、こんなことに挑戦しよう」などと前に進む力を得ているように感じました。こうした変化は、非常に意義深いですよね。

三陸の「国際化」へ

――三陸とアジアの交流について、それぞれの立場から今後の構想や展望を聞かせてください。

中村　震災から8年が過ぎ、住宅整備などハード面の復興事業は終盤戦に入っています。その分、復興事業に携わる人たちは段々と減ってきて、震災前の〝平時〟に戻りつつあります。つまり、地元としては本当の意味で、持続的に経済を回す仕組みを組み立てていく必要があるでしょう。その意味でも、文化や芸術というソフト面の取り組みは、これからの地域の活性化に大いに意義があると思います。

柄　私たちの立場としては、海外とのネットワークやノウハウを今後も生かしていきたいと思います。中村さんや佐東さんをはじめ、地元をよく知る人たちと協力しながら、アジアを中心に海外とのつながりを生み出すことに、さらに貢献していきたいですね。

中村　地元の私たちとしても、海外の人たちに三陸に足を運んでもらうことは地域経済の発展につながる大事な要素です。現在は台湾の観光客が最も多いですが、ほかのアジアの国々からももっと来ていただきたいですし、さらに欧米の観光客も呼び込みたいと思っています。

2019年は夏に「三陸防災復興プロジェクト」、秋にはラグビーワールドカップの試合が岩手県釜石市で開催されます。まずはそこに向かって、国内に加えて海外からも多くの人に来ていただき、郷土芸能を含めて三陸の魅力にたっぷり触れてほしいですね。芸能を通して、三陸の地域と地域をつなぎ、三陸と海外をつなげる。そうした文化交流を深めていきたいですね。

佐東　三陸は、まだまだ国際化されていないのが現状です。まず必要なのは、情報発信の強化でしょう。そのため、手始めに各地の芸能情報を網羅した外国語版のマップを作成する予定です。それを片手に三陸鉄道に乗って三陸の芸能を楽しむ。そんな光景を思い描いています。

将来的には、世界中から三陸に人が押し寄せ、外国人が隣にいることが当たり前になるような文化をつくっていきたいですね。近年は、三陸の各市町村も海外観光客の誘致などに力を入れています。私たちは「三陸国際芸術祭」をはじめとする芸能や芸術分野で関わらせていただき、行政や住民、また『国際交流基金』など外部の人たちと一緒に、三陸の国際化を進めていきたいですね。

新たな学び、発見が生まれ未来へ突き進む原動力に

「三陸鉄道リアス線」として一本につながった三陸鉄道。開通初日は記念列車の運行や記念イベントがあり、住民らは待望の全線開通に歓喜の声を上げた。

CHAPTER 1

僕たちは海を越えて交流した

三陸とアジアの各地の間で、どのような交流を行ったのでしょうか。
交流が始まった経緯や交流の内容、
地域と人々にもたらした変化などについても紹介します。

関係性こそが国を越えるドア！

「DOOR to ASIA」は、アジア各地のデザイナーたちが地域に一定期間滞在し、地元の事業者と自国をつなぐ〝コミュニケーションデザイン〟を制作するユニークなプログラム。『国際交流基金』やプロジェクトメンバーにより2015年に始まりました。

取材・文＝小久保よしの
写真＝門傳一彦、樽見星爾、新田理恵

プロジェクト概要は ➡P60～

「何ができるのか？」から「どうするか」へ

——東日本大震災以降、三陸で活動していた友廣さんと、海外のクリエイティブに精通している矢部さんで、どのように始めたのですか。アジア人のデザイナーを三陸に拠点を置いている事業者のもとへ連れて行き、滞在してもらうわけですよね。

友廣裕一さん（以下、友廣） 僕から矢部さんに「自然災害はアジア共通の課題。復興にクリエイティブがどう関われるのかに関心があるデザイナーに、ラーニングプログラム（学習プログラム）として来てもらえたらいいですね」と話していました。デザイナーが三陸に入る前に、矢部さんがきちんと彼らとコミュニケーションをとってくれて、気持ちがそろったうえで始まった。その初期設定が大事だったと思います。

矢部幹治さん（以下、矢部） 国を越えてのデザイナーズ・イン・レジデンスは、誰もやったことがない試みでした。このプログラムは、「これをつくってほしい」と依頼される一般的なクラ

●**友廣裕一（ともひろゆういち）**／「DOOR to ASIA」プロジェクトメンバー、『一般社団法人つむぎや』代表理事　全国70以上の農山漁村を訪ね、人が生かされる仕事や暮らしについて考えを深める。東日本大震災以降は生業づくりの事業などを立ち上げてきた。

●**矢部幹治（やべみきはる）**／「DOOR to ASIA」プロジェクトメンバー、『エージェント・ハムヤック株式会社』代表　ロンドンのクリエイティブエージェンシーに8年間勤めた後、2013年に帰国。デザイン・アーティストマネージメントエージェンシーを設立する。

写真上左／日本の文化を体験する時間も。写真上右／気仙沼の酒蔵『男山本店』にて、代表取締役社長の菅原昭彦さんと話し合う様子。写真下左／ホームステイでは夜も語らい、心を開き合うきっかけになりました。写真下右／山形に拠点を持つ『アカオニ』の小板橋基希さんも参加。

デザイナーは魚市場を視察し、三陸の漁業について理解を深めます。こうして「自分に何ができるか」を探り、デザインへとつなげるのです。現在「DOOR to ASIA」に参加した全15社のうち7社がデザイナーとの仕事を進行中（P52参照）。

イアントワークとは異なります。具体的な依頼はなく、「自分たちに何ができるのか」を考えなくてはいけないんです。

——どう探って、見つけていくものなのでしょうか？

友廣　デザイナーへのお題は「コミュニケーションデザインを提案してください」だけで、ツールなどは何も定めていないんです。「そもそも何が大事なんだろう？」というところから入ってもらえるようにしました。

矢部　宮城県気仙沼市の『リアス・アーク美術館』を訪ねて震災前後の変化を感じてもらったり、岩手県陸前高田市の復興の話を聞いたりして、震災でどんなことがあったのかをインプットしました。そのうえで、事業者がどんなことを考え、どう頑張っているのか、熱意を感じてもらいます。現場を見て、可能であれば一緒に働く。そうすると、「自分たちがどうするか」が見えやすくなるのだと思います。

デザイナーの純粋な問いが心の扉を開かせた

友廣　僕は全国各地を旅していた経験で「ホームステイが肝になる！」と思い、2年目から始めました。仕事をしているときの立ち居振る舞いと、帰宅してからのそれは、大分違うんです。日中にどれだけ会っても、関係の深まり方が限られる部分があるなと思っていて。関係性が深まって、『株式会社石渡商店』さんはプログラム終了後、すぐにシンガポールとインドネシアまでデザイナーに会いに行っていました（P48－49参照）。

あと、矢部さんたちが担当した通訳コーディネーターも重要でした。人と人の心と心をつなぎ、理解し合うには何が必要かをやりとりしながら、通訳していましたよね。

矢部　言葉の変換だけを重視してすべて通訳してしまうと、デザイナーと事業者間のコミュニケーションを全部担ってしまいます。だから、コミュニケーションの機会を奪わないように、ときに引くことも意識していました。デザイナー自身が「自分ごと」にしていけるよう、すべて情報をこちらから話して提供するだけではなく、対話やインタビューの場、考えて悩んでもらう時間も大事にしました。

友廣　外国人だからこそ素朴な疑問を持ち、無邪気に聞いているシーンもけっこうありました。例えば、老舗のしょうゆ屋さんに「ここのしょうゆはなぜおいしいのか？」と聞くんです。「うちは200年続いているからね」って説明されたら、多くの日本人は納得してしまうんだけど、それだけでは理解せずに「なんで？」「なんで？」と。そんな質問が3時間ぐらい続く（笑）。

そうしたやりとりのなかで、感動したこともありました。菜種油の製造をしている『株式会社デクノボンズ』さんは普段一人で仕事をしているのですが、デザイナーが「なぜ人を雇わないの？」とズバッと聞いたんです。夜、自宅でお酒を飲みながら語り合い、その謎が解けていきました。事業への熱い思いや、家族をとても大事にしていることを明かしてくれ、「人を雇うということはその人の家族も背負うこと。その覚悟ができず、雇うことを躊躇していたのかもしれない」と。話を聞きながらみんなで泣いたそうです。それまでは家族に仕事の話はほとんどしていなかったらしく、その場にいた奥さんも初めて聞いたそうです。デザイナーの滞在が、

心を開き家族間の理解が深まるきっかけにもなったんです。

実は『デクノボンズ』さんは「生産量が少ないから輸出できないし、英語を話せず海外にも行ったことがないから」と、何度も「DOOR to ASIA」への参加をお断りされたのですが、参加して心境に変化があったようです。なんと報告会の直後、「この10年間でこれくらいお金を貯めてきたんだけど、これで彼らにデザインをお願いできるかな?」とその場で相談されました。今はそのデザイナーと一緒に、仕事をしています。

外国人デザイナーが良き理解者になっていく

――交流が三陸の人々を変えていったのですね。

友廣 良いデザイナーほど、デザインをするために何が一番大事なのかをつかもうとします。そのために問いを投げるんですよね。大切にしたいことが増え過ぎた事業者にとっては、それが頭を整理するプロセスになっていく。「これが大事なんだ」とお互いに腑に落ちたところで、デザイナーはそれを形にして伝えてくれるから、事業者の心に響くんです。毎年「DOOR to ASIA」が終わるたび、何人かの事業者から「今まで会ってきた誰よりも、デザイナーが自分のことを理解してくれたような気がする」というようなことを言われました。

事業者とデザイナーが一生続く関係性に。

矢部 事業者に「海外でもうちはこんなにかっこよく見えるんだ、と自信をもらった」と言われたこともあります。

デザイナーのほうも変化していますよ。その後の働き方を変える人が多いです。「DOOR to ASIA」で事業者との距離感の大切さに気づき、クライアントとの関係性が変わったり、自分たちのコミュニティプロジェクトに関わるようになった人もいます。

友廣 国際交流プログラムですから、事業者とデザイナーの間に一生続くような関係ができたらいいなと願い、それをゴールとしていました。今すぐではなくても、いつか相談をしたり一緒に仕事をしたりできるかもしれない。良い関係性があれば、それが本当の「国を越えていくドア」になると思います。

「DOOR to ASIA」の会場にも事業者にもなった『箱根山テラス』

●長谷川順一（はせがわじゅんいち）／『株式会社箱根山テラス』代表取締役 岩手県陸前高田市出身。東日本大震災以降、エネルギーと経済の地域内循環の重要性を強く感じ、本業の建設業と並行して木質バイオマスによる地域熱供給事業を推進。

自分の常識や価値観が崩れ新鮮でおもしろかった

「DOOR to ASIA」を、当初は「海外のデザイナーが招へいされ、パッケージデザインやウェブデザインをするのだと思っていました」と話す長谷川さん。開催初年度から『箱根山テラス』の場を提供し、デザイナーと事業者のやりとりを見ていたら、それだけではないプログラムだと分かり、「言語や育った環境も違うなかで向き合い、真剣にやりとりをしている。おもしろそうだ」と思ったと言います。

2018年、今度は事業者として参加しました。「『箱根山テラス』をつくったときから『持続可能な社会をつくりたい』と思っていたのですが、その持続可能な社会のイメージも国籍や人によって解釈が違うと分かり、自分の常識や価値観が崩れ、おもしろかったです。自分に見えている地元の光景と、デザイナーに見えている光景は必ずしも同じではないんだとも感じました」。

デザイナーから、横田小学校の旧校舎をデザインした「高田共和国」を提案された長谷川さんは、「これは〝提案〟ではなくて〝約束〟だと思っています。やらないとおもしろくない」と話したそうです。それは、自然、エネルギー、アートの3つをテーマに遊べるプランでした。長谷川さんはニューヨークや徳島県・神山町などでアートがまちの風景に溶け込んでいる様子を見て、「陸前高田を被災地からアートのまちにしたい」と考えていたのです。現在、横田小学校の旧校舎をさまざまな表現者がアート活動を行う場にする準備をしています。デザイナーのいる国を家族と訪ね、交流も続けていくつもりだそうです。

『箱根山テラス』が持つ"場の力"もコミュニケーションをサポート。テラスでは、三陸の景色や海風を感じてリラックスしながら、昼も夜も参加者たちが語り合いました。

プロジェクト概要は →P72~

世界と響き合う〝郷土芸能〟

三陸を海外へ発信する「三陸国際芸術祭」

取材・文＝近藤快（P24－27）、小久保よしの（P28－29）　写真＝井田裕基
写真提供＝「臼澤鹿子踊」保存会（P26－27）

2019年2月9日から3月25日にかけて、三陸とアジアの郷土芸能の交流をテーマにした「三陸国際芸術祭」が開催されました。『国際交流基金アジアセンター』は、同芸術祭の主催団体に名を連ね、郷土芸能団体による三陸とアジアの相互訪問などを行う「Sanriku-Asian Network Project（サンプロ）」に取り組んでいます。

5回目の開催となった今回は、青森県八戸市と岩手県宮古市、大船渡市を中心に三陸広域で開催。インドネシアの郷土芸能「ジャティラン」を演じる2つのグループ「New Zugus Gedroex（ニュズグス・グデュッルッ）」と「Krincing Manis（クリンチン・マニス）」が来日し、各地の郷土芸能団体や小学校などを訪問。互いに演技を披露したり、踊りを習うワークショップを行うなど、交流を深めました。

こんな交流をしました！

女性陣の華やかな衣装やメイク

女性のメンバーで構成する「クリンチン・マニス」。“女性だけ”のスタイルは珍しく、衣装やメイクも独特で、その違いは“異文化交流”を強く印象付けます。

「これ、踊れるかな……？」

「ニュズグス・グデュッルッ」のメンバーが演技を指導。参加した住民らは、独特な動きやステップに悪戦苦闘しながらも、終始笑顔の絶えない時間を過ごしました。

「三陸の郷土芸能を教わりました!」

「ジャティラン」の演者たちも、三陸各地の郷土芸能を習いに行きました。自分たちの芸能とは異なる手足の動かし方や衣装などに、刺激を受けたようです。

音色を味わうガムランの体験も!

ワークショップの参加者は、独特な音色を奏でる「ガムラン」にも興味津々。「ニュズグス・グデュッルッ」のメンバーも、身振り手振りを交えながら楽しそうに教えています。

「ジャティラン」のメンバーより

日本に来るのは初めてでしたが、忘れられない経験になりました。日本の芸能を見て驚いたのは、小さな子どもからお年寄りまで、世代を越えて熱心に活動していることです。「芸能に年齢制限はないんだ」と刺激を受けました。交流した人たちが、とても親切に歓迎してくれたこともうれしかったです。芸能を愛する仲間として、心が通じ合う瞬間が何度もありました。芸能は、言葉の壁を越えるんですね。この経験を演技に生かしたいと思います。

三陸の“地域間”交流も

大船渡市で披露された「金津流浦浜獅子躍」。頭上に伸びる竹製の飾り（ササラ）は、2mを超えるそう。ほかにも数多くの芸能が披露され、“地域間”交流にもつながっています。

◎「三陸国際芸術祭」主催：三陸国際芸術推進委員会、国際交流基金アジアセンター、NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク　共催：八戸市、宮古市、大船渡市、久慈市、階上町、岩泉町、大槌町、住田町、普代町、田野畑村、（公社）全日本郷土芸能協会、三陸鉄道株式会社、NPO法人いわてアートサポートセンター、（一社）アーツグラウンド東北、みんなのしるし合同会社

国際交流の始まり❶

“誰でも歓迎”から海外への扉が開かれた

インドネシアの芸能団体と、相互訪問や作品の共同制作に取り組んでいる人たちがいます。岩手県・大槌町に400年以上前から伝わる郷土芸能「臼澤鹿子踊」。交流はどう始まり、いかに心を通わせ続けているのでしょうか。

●東梅英夫（とうばいてるお）／「臼澤鹿子踊」保存会会長　1945年、岩手県・大槌町に生まれる。「臼澤鹿子踊」の活動に熱心な家系に生まれ、9歳から踊りに参加。一度故郷を離れるも、Uターン後に保存活動に没頭し、『臼澤鹿子踊伝承館』の建設にも尽力。趣味はゴルフ、盆栽。

お互いに訪問し共につくる

東京都・六本木。近代的な高層ビルが立ち並ぶ一角で、獅子（シシ）の仮面をかぶった踊り手たちが、異様な音色を奏でながら体を激しく動かしています。

2016年10月に開催された、芸術の一大イベント「六本木アートナイト」。「Sanriku-Asian Network Project」の一環で、三陸の郷土芸能団体とインドネシアのガムラン・ダンスグループらが共同制作した「シシの系譜」が披露されたのです（P73参照）。海を隔て、遠く離れた場所にある郷土芸能が、一つに融合した瞬間でした。

その中心人物の一人が、岩手県・大槌町の「臼澤鹿子踊」保存会会長の東梅英夫さんです。東梅さんたちは、インドネシア・バリ島に伝わる伝統舞踊「バロンダンス」のグループや、同国の民族音楽「ガムラン」奏者などと共演。長い歴史のなかで、新たな一ページを刻みました。

このコラボレーションが実現したきっかけは、2015年に開催された「三陸国際芸術祭」でした。インドネシア・アチェ州などから伝統芸能団体が招かれ、東梅さんたちは彼らと演舞を披露し合うなど交流を深めました。

その後、今度は東梅さんたちがインドネシアを訪問。「サンプロ」の、三陸の芸能団体をアジアに派遣するプログラムです。アチェ州とバリ島を訪ね、ダンサーと再会。そうした相互交流を経て、「六本木アートナイト」での共演が実現したのです。

東梅さんは、「ここまで長く交流が続くとは、夢にも思わなかったですね」と笑顔で話します。これには、東梅さんが「『臼澤鹿子踊』を続けるためには新しい変化が必要」と、古くから“よそ者”を歓迎する姿勢を貫いてきたこととも無関係ではありません。“長男限定”“女人禁制”など、郷土芸能には伝統的なしきたりが少なくないなかで、「臼澤鹿子踊」は1960年代から地区外の参加希望者に門戸を開くなど、先進的な活動を続けてきたのです。

そんな東梅さんにとって、「三陸国際芸術祭」などを通じたアジア各国との交流は、「影響は計り知れない。大きな財産になっています」と言います。「これまでは主に町内だけで活動してきました。それが国境を越えた海外の人たちとの活動の機会に恵まれ、人脈が広がったことで、郷土芸能はクローズアップされ、活性化しています。その姿を見ている子どもたちや若手にとっても、自信と誇りになるはずです」。

伝承するには、変化が必要――。交流による活性化が若手の自信と誇りになる。

アジアと三陸の境界を軽々と飛び越えていける。それが郷土芸能だ。

通じているなと」。

佐東さんは「大船渡市郷土芸能協会」の副会長・古水力さんと出会い、古水さんの次の言葉に胸を打たれます。「ただ保存するのではなく、ずっと継承されてきた自分たちの踊りを未来の人たちにつないでいくことこそが、私たちの使命なのです」。三陸の人々の励みになるようなことができないかと考えたとき、古水さんから出たのが海外の仮面フェスティバルに参加したこと、そしてアジアの踊りでした。「通じているところもありますし、アジアと三陸の境界を軽々と飛び越えていけるものが芸能だと思うんです。また、日本では芸術と芸能の間に垣根があります。それをなくした芸術祭をしたいとも考えました」。こうして国内の交流が国際交流へと広がっていったのです。

国際交流の始まり❷

“おもてなしをされる”から“習いに行く”へ

「習いに行くぜ！東北へ！」や「三陸国際芸術祭」が始まったきっかけは東日本大震災の後、佐東範一さんたちが「自分たちに何ができるのか」と考えたこと。そして“ある出会い”によって、でした。

●佐東範一／プロフィールはP14参照。

踊りは見えないものと人をつないでいる

芸術や文化に携わる者が、震災による甚大な被害を前に、何ができるのか。佐東範一さんはそう考えながらも、動くことをやめませんでした。震災の翌々月から、被災地の各避難所で体をほぐすワークショップの活動を仲間のダンサーたちと一年間行いました。「2年目になったとき、ふと気づいたんです。被災された方たちは暮らしが大変ななか、人を集めて我々の受け入れをしてくださっていました。こちらが何かをしに行っているのに、逆にもてなされている。これでは立場が違うと思ったんです」と話す、佐東さん。

その頃に聞いたのが、三陸で盛んな郷土芸能の話。同時に、それが大きな被害を受けたこと、後継者が少ないことも聞きました。佐東さんは「踊りの専門家として、郷土芸能を習ってほかの人たちに伝えていくことならできるのでは！」と考えたのです。こうして〝踊りを習う〟という両者の交流が始まりました。「習い始めたら、各集落に芸能があると分かったんです。こんなところが日本にあったのか！　と驚きました。地域のお祭りを見に行ったら、20ぐらいの郷土芸能や新舞踊があり、芸能に対する強い思い入れを感じました。そのとき『この風景、どこかで見たことあるなぁ』と思ったら、バリ島のバリ舞踊だったんです。バリ島を含めて、アジアとすごく通じるものがあると感じたんですね。バリ舞踊は神に捧げるもの。三陸の郷土芸能も、例えばお盆に鹿踊りが踊られ、死者への思いを表します。踊りが神や死者など見えないものと人をつないでいる点が

防災の知恵を伝える楽しい方法

『国際交流基金アジアセンター』が主催する、アジアから防災や被災地支援にまつわる次世代のリーダーを輩出する人材育成プロジェクト。総合アドバイザーの永田宏和さんに話を聞きました。

取材・文＝小久保よしの　写真＝田中健（P30）
写真提供＝NPO法人プラス・アーツ

防災や防災教育の担い手が今後より必要になる

防災をキーワードに、国内外で数多くのプロジェクトを進めている『NPO法人プラス・アーツ』。阪神・淡路大震災から10年の事業として2005年より、子どもが家族や友達と楽しみながら防災の知識や技を身につける防災イベント「イザ！カエルキャラバン！」の開発に取り組み、防災やその支援を行うようになりました。

「HANDs！プロジェクト」はアジア9か国の若者がクリエイティブかつ持続可能な方法を用いた防災教育について学び合う人材育成プロジェクトで、国内外で活動を行っています。三陸では「スタディツアー」を実施しました。永田宏和さんは、「その土地でしか学べないこと、被災者の声や被災地のリサーチをし、楽しいプログラムを開発しています」と話します。三陸の「スタディツアー」では被災の爪痕が残る場所を訪ねたり、語り部の話を聞いたり、地元の文化を体験したりしました。「当初は被災地に行くことがメインでしたが、しだいに防災や防災教育の担い手を育てる方向になっていきました。担い手をつくれば地域の防災力が上がるからです。近年は世界的に災害が増えているので、地域に寄り添った防災を考える担い手がこれからもっと必要になると思います」。

そこで「スタディツアー」に組み込まれたのが、冒頭にも登場した「イザ！カエルキャラバン！」でした。地域の防災訓練プログラムとおもちゃ交換会「かえっこバザール」を組み合わせた防災イベントで、消火や救出、備えを楽しく学びます。「子どもをいかに楽しませながら防災の知恵や技を伝えるか。みんなが学びたいと思うような魅力的なプログラムをつくることも大事です。暮らしのさまざまなシーンを想定した、万が一の震災時に役立つ実践的な内容になっています」。

国内では、宮城県東松島市、兵庫県神戸市、岩手県宮古市で開催されました。三陸や日本各地、そして世界各地で、防災意識の〝芽〟が育ち始めています。

プロジェクト概要は→P66～

＼子どもに防災の知恵や技を伝える／

「イザ！カエルキャラバン！」

遊びの延長で学べる！

「イザ！消火作戦！」では、ゲーム形式で消火器の使い方を学んだり、炎の的に向かってバケツで水をかけたりし、災害時の火災の消し方を学びます。「イザ！救出作戦！」では、身の回りにある毛布で応急的に担架をつくってけが人を搬送するほか、下敷きになってしまった人を助けることができるジャッキアップや応急手当を学びます。「イザ！備え作戦！」では、家具の転倒防止、紙食器のつくり方に加え、カードゲームやすごろく、紙芝居、ジャンボかるたなどで楽しく防災を学びます。

●永田宏和（ながたひろかず）／『NPO法人プラス・アーツ』理事長、「HANDs！プロジェクト」総合アドバイザー　神戸を拠点として、災害とクリエイティビティをテーマにした展覧会「EARTH MANUAL PROJECT展」、無印良品の防災啓発キャンペーンなどさまざまな防災プロジェクトに携わるプロデューサー。世界中で防災教育の普及を行う。

Tohoku seen by Robin

「人のやさしさ」に触れた三陸縦断600kmの旅

青森県八戸市と福島県相馬市をつなぐ「みちのく潮風トレイル」を歩きながら、地域住民と心温まる交流を重ねた人がいます。イギリス人の父と日本人の母をもつRobin Lewisさん（ロビン・ルイス、以下ロビンさん）。全長約600km（当時※）に及ぶ長い旅路で、「数え切れないほどの出会いがあった」と言います。果たして、どんな出会いがあったのでしょうか。

取材・文＝近藤快　写真提供＝ロビン・ルイス

プロジェクト概要は →P66～

東北の魅力を紹介します！

●Robin Lewis（ロビン・ルイス）／『世界銀行』東京防災ハブ コンサルタント
1988年、イギリス生まれ。日本在住約13年。「HANDs！プロジェクト」への参加をきっかけに、東北の情報を英語で発信するプロジェクト「Explore Tohoku」を企画、2017年夏に「みちのく潮風トレイル」を踏破。

※2019年5月現在、約750kmまで延伸。同年夏の全線開通に向けて工事が続いている。

Tohoku seen by Robin 01

出会った人々の「おもてなし」

ROBIN

「みちのく潮風トレイル」の旅は、「何よりも人の温かさに触れた日々でした」とロビンさんは話します。

「泊まりにおいで」。宮城県石巻市で野外でテントを設営していると、ある姉妹に声をかけられました。テント泊をしようとするロビンさんを心配し、家に招いてくれたのです。「私たちはテーブルを囲み、せんべいを食べて、お茶を飲んで、とにかく笑いました」。

「なぜ声をかけてくれたんですか」。そう尋ねると、姉妹は震災の記憶を語りだしました。「あのとき、国内外からたくさんの人が助けに来てくれたから、その恩返しがしたい」。その言葉に、ロビンさんは「助け合う心に感動しました」と言います。

偶然出会った姉妹の家に“ホームステイ”

〈宮城県石巻市〉

「風の電話」から“あの日”に思い巡らす

〈岩手県・大槌町〉

岩手県・大槌町の小高い丘に設置されている「風の電話」。この場を訪ねたことも、心に残るエピソードの一つです。

電話回線につながらない、ダイヤル式の黒電話。震災後、亡き人に思いをはせ、“会話”する空間として、住民たちに利用されています。海外からの訪問者も多く、電話ボックス内にあるメモ帳には、さまざまな言語で訪れた人の思いが綴られているそうです。

設置した男性は、熱心に「風の電話」に込めた思いを聞かせてくれました。「大切な人を思う気持ちを学びました」とロビンさん。あらためて“あの日”に思いを巡らす時間を過ごしたのです。

「みちのく潮風トレイル」とは？
青森県八戸市から岩手県、宮城県を経由し、福島県相馬市までの海岸線に沿って設けられた歩道。東日本大震災後、震災の記憶を次世代に語り継ぐために整備された。環境省が運営している。

Tohoku seen by Robin

02 観てほしい「美しい自然」

ROBIN

写真上／ユリなどが群生する海辺（宮城県大崎市）。写真中／夕日で赤く染まった海（八戸市）。写真下／岸壁に建つ神社（大槌町）。

海、川、里、森。海岸沿いを歩いていると、雄大な自然が目に飛び込んできます。その景色は、「今まで日本では見たことがないほどの美しさでした」とロビンさん。

目の前に広がる青い海、海辺をカラフルに彩るユリやアジサイ、岸壁にそびえる鳥居、心を癒やす波の音、海に沈む夕日。ロビンさんにとって「そのどれもが驚き」だったそう。「東北には、このような魅惑的で個性あふれるスポットがたくさんあります」。

ROBIN

Tohoku seen by Robin

03 食べてほしい「名物の一品」

写真上／釜石市で営業している“ラーメンバス”と店主。写真下／ホヤをPRするイベント。右から2番目がロビンさん。

古びたバスに、「ラーメン」の文字。岩手県釜石市で遭遇した“ラーメンバス”です。ロビンさんは旅の道中で、東北ならではの「食」も堪能。「ラーメンは私の人生」という70歳（当時）の店主との出会いとそのラーメンの味は、忘れられない思い出の一つ。

また、東北名物の「ほや」をはじめ、「新鮮なシーフードも魅力」と絶賛。旅の途中で、震災後のボランティア活動で出会った仲間たちと、ホヤをPRするイベントにも参加しました。

数え切れない出会いと交流「外国人観光客を増やしたい」

この旅で住民との交流を重ねてきたロビンさん。そもそも、なぜこのプロジェクトを始めたのでしょうか。また、旅の様子は「Explore Tohoku」のホームページやSNSで熱心に発信してきました。その思いは――。本人に聞きました。

想像以上の体験

――「Explore Tohoku」を始めたきっかけを教えてください。

まず、私自身が震災後の東北の現状を知りたい思いと、それを日本だけでなく、海外の人にも伝えたい思いがありました。そのうえで、外国人観光客を増やすことが目的です。「HANDs!プロジェクト」のアクションプランとして企画しました。

――旅の途中で、いろいろな人たちと出会ってきたんですね。

本当に驚きで、想像以上の体験でした。私は外国人の風貌ですし、きっと話しかけづらいだろうと思っていたんです。

でも、真逆でしたね。歩いていると、いろいろな人に声をかけられました。「どこ行くの？」という一言から他愛のない会話をしたり、突然「ストップ！」と呼び止められ、缶ジュースを手渡されたり。旅の最中に、ここまでの交流や「おもてなし」を経験したのは初めてでした。

世界各国から反響

――SNSで発信した効果はありましたか。

ホームページやフェイスブックを通じて、「オススメの宿泊先を教えて」などと世界中からコメントが届き、実際にトレイルを歩いた人がたくさんいます。今はフェイスブック内にグループをつくり、そこで互いに旅の情報を交換するようになりました。

――東北は、観光地として魅力的な場所なんですね。

美しい景色、おいしい食べ物、人の温かさ。東北は観光地として、大きな可能性を秘めているでしょう。まだまだ東北を訪れる外国人観光客は少ないので、もっといろいろな人に来てもらいたいですね。

EXPLORE TOHOKU
DISCOVER THE MICHINOKU COASTAL TRAIL

ホームページ:https://www.michinokutrail.com/ フェイスブック:https://www.facebook.com/exploretohoku/

東北とアチェ。被災地間の〝国境〟と〝世代〟を越えた循環

スマトラ島沖地震で甚大な被害を受けたインドネシア・アチェ州と、東北。
“被災地同士”を結び、学びを共有し次世代に紡いでいこうと活動しているのが、
『NPO法人地球対話ラボ』です。その交流の様子を紹介します。

取材・文＝近藤快　写真提供＝NPO法人地球対話ラボ

アチェを知ることがヒントになる

宮城県気仙沼市に2019年3月にオープンした『気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館』。その一角に、インドネシア・アチェ州の子どもたちがつくった絵や絵本などが展示されています（写真上）。『NPO法人地球対話ラボ』が行っている、アートを通じて東北とアチェをつなぐプロジェクトで創作されたものです。『国際交流基金アジアセンター』が主催する「三陸国際芸術祭」の連携企画の一つとして、展示が実現しました。

『地球対話ラボ』は2013年から、宮城県東松島市の小学生とアチェの小・中学生がインターネットテレビ電話を使って交流したり、アチェの大学生が東松島を訪問し、子どもたちとのワークショップなどの活動を実施。2017年からはコミュニティアートの要素を加え、東北とアチェを結ぶ多彩なプロジェクトを行っています（P78参照）。

東北とアチェ。被災地同士の交流は、何をもたらすのでしょうか。『地球対話ラボ』の渡辺裕一さんは、「国境や世代を越えた循環」を挙げます。「アチェは被災地ツーリズムが盛んです。被災の記憶をどう伝承していくか。アチェを知ることは、そのヒントになります。また、アチェでは若者が熱心に震災復興に取り組んでいます。その若者の背中を見て、東北の子どもたちが将来、地元で震災のことを伝えたり、国際的に活躍したりする人材に育つ可能性もあります」。

そして、活動は新たな局面を迎えることになります。それが、「三陸国際芸術祭」との連携企画です。2019年3月4日から17日に、気仙沼市と岩手県・大槌町で6つの企画を実施。アチェから州政府観光局の副局長や津波博物館の職員、大学生らが来日し、被災現場をめぐるツアーや住民らと交流するトークイベントなどに参加しました。

渡辺さんは、今後について「ビデオ対話による交流のほか、絵の展示や共同制作などアートによる相互交流に継続的に取り組んでいきたいですね」と意気込んでいます。

『地球対話ラボ』の三陸での活動
～三陸とインドネシア～

宮城県気仙沼市

「三陸国際芸術祭」の連携企画で、現代アーティストの門脇篤さんが制作した映像作品「気仙沼のインドネシア人」を展示。市内に暮らすインドネシア人技能実習生を題材にした作品で、“共生”の大切さを投げかけます（写真上左）。アチェから来日したメンバーは、被災現場を視察するツアー「想いにふれる　せかいが広がる　どこでもピントゥさんぽ　in　三陸」に参加。復興に取り組む人々の声に耳を傾け、“学び”の時間を過ごしました（写真上右）。

岩手県・大槌町

大槌町で行われたメインプログラムの一つが、「三陸とアチェ、未来への対話」と題した交流トーク会です。アチェ州の文化観光局副局長や大学生、東日本大震災の常設展示がある『リアス・アーク美術館』の副館長、大槌高校の復興研究会の生徒らが参加。それぞれの活動や経験を共有し、未来への一歩を踏み出す機会になりました。アチェの名物料理「ミー・アチェ」（アチェ焼きそば）や大槌町の郷土料理を楽しむ一幕も（写真左）。

●渡辺裕一（わたなべゆういち）／『NPO法人地球対話ラボ』理事・事務局長　映像作家、プロデューサー。2002年、日本とアフガニスタンの高校生によるテレビ電話対話を開始。2010年に同法人を設立し、2013年から東北とインドネシア・アチェの交流プロジェクトを実施。

【私の見た東北】

●アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム

被災地を照らす光

Aziz Ali Dad
（アジズ・アリ・ダード）

日本は世界で最も防災意識が高い国でありながら、2011年3月11日に発生した巨大地震とその後の津波により、東北地方は壊滅的な被害を受けました。犠牲者1万5897人、行方不明者2533人（2019年3月現在）。こうした数値は、大震災のすさまじさを量的側面から物語ります。しかし、被災者の心や精神面に与えた衝撃は、数値で推し量ることができません。震災で命を奪われた愛する人の記憶や、津波にのみ込まれた場所との関係が消え去ることはないからです。自然災害は、人々の心の風景をも根本から変えてしまうのです。

東北では、日本政府による復興と防災に向けた取り組みを視察しました。地域の復興への取り組みで注目したのは、被災者の苦しみを和らげ、生活の改善に向けた粘り強く献身的な姿勢です。政府のサポートだけでなく、地域住民が率先して、自己と社会の精神的再生に重点を置く取り組みを行っています。

災害は人々の心に深い恐怖を植え付けます。被災した地域社会が復興への活力を取り戻すには、破壊され、失われた心の風景を修復し、心のバランスを取り戻す作業が欠かせません。復興の取り組みとは、町並みや生活環境など物理的な風景を元に戻すことだけではないのです。実際、被災したコミュニティを心理的に立ち直らせるために、いくつもの素晴らしい取り組みが進められています。

岩手県・大槌町は、津波にのみ込まれた場所の一つで、その爪痕は、今でも町中にはっきり残っています。一方で、物的インフラの再建は着々と進み、大々的な工事により、まちの風景は変わりつつあります。大槌町文化交流センター『おしゃっち』の館長は、海岸沿いに建設中の巨大な防潮堤が完成すれば、海が見えなくなるだろうと話してくれました。このセンターには、3月11日の震災に関する視聴覚資料が保管されています。死と破滅を経験しながらも、生活復旧への強い意欲により生き延びたこのまちに復興意欲を根付かせる目的で、先の大震災のほか、過去の災害に関する郷土資料も集められました。図書館が併設され、子どもたちの学習コーナーや、お祭りにも使用できるイベントスペースと美しいミニガーデンもあり、建物自体が住民の憩いの場となっています。

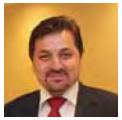
同じく『せんだいメディアテーク』も、芸術、音楽、写真といった各種表現媒体の展示スペースやカフェ、図書館、アートをテーマにしたイベント用スペースをもつ複合施設です。アートや各種メディアを通じ、マスコミには取り上げられない被災者の日常を記録、紹介し、災害後のメディアリテラシーの在り方を問い直す試みが行われています。こうした取り組みの目的は、震災のトラウマに満ちた生活空間に、色彩と旋律、活気を吹き込むことなのです。

ショックや悲しみのため失われた感情と感覚を取り戻すことで、身体的リハビリが進み、同時に社会再建への道も開かれる――、被災地復興のプロセスにおいては心理面のリハビリが何よりも重要です。そのため、被災したコミュニティをサポートする人々の能力強化が欠かせません。訓練を受けていない人が他者のトラウマ的な体験に触れると、その人自身もうつ状態に苦しむ可能性があります。大槌町の平野公三町長との会合は、精神的・身体的リハビリの複雑さとその課題について、見識を新たにするものでした。

イスラム神学の高名な愛の詩人ジャラール・ウッディーン・ルーミー（1207年～1273年）は、苦痛と悲しみについて「傷口とは、あなたに光が入り込む場所である」と綴っています。災害による死と破壊は、人々の心と魂に深い傷痕を残し、意識を暗い悲しみのふちに突き落とします。感情豊かな魂を輝かせるには、外なる世界と内なる世界のバランスを取り戻す必要があります。東北の被災地においては、物的インフラの復旧と並行して進められている心的バランスのリハビリによって、社会だけでなく人の心にも光が照らされています。被災地の復興に尽力、貢献されている方々は、心に傷を負い、悲しみに包まれたコミュニティに光をもたらす案内人なのです。本プログラムに参加したことで、まちの風景と心の風景の復興について深く学ぶことができました。気候変動による自然災害が急増するパキスタンに、日本で学習したこの光を持ち帰ります。

《英語原稿を日本語に翻訳したものです。》

※アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム（ALFP）とは――
1996年度より『国際交流基金』と『国際文化会館』の共同事業として実施。アジア諸国のさまざまな分野において際立ったリーダーシップを発揮する知識人を毎年7～8名選抜し、フェローとして約2か月間、日本に招へいするもの。2018年度は、アジズ氏をはじめ8名のフェローが参加、9月9日から11月3日まで滞在した。



●アジズ・アリ・ダード（パキスタン）
パキスタン北部のギルギット・バルティスタン州出身。現地NGO『アガ・カーン地域支援プログラム（AKRSP）』で活動するほか、地域を代表するライターでもあり、国内の主要英字紙「The News」のコラムニストも務める。

大槌町文化交流センター『おしゃっち』の「震災伝承展示室」では、写真と映像、言葉によって震災を伝えています。まちの高校生たちが展示を担当するなど、伝承方法に工夫を凝らし、心に届く発信を行っています。

今も続く、国際交流

ただ一度の交流をして終わり、ではなく
関係性やプロジェクト、思いなどを継続している人たちがいます。
さまざまな関係性のほか、彼らの“今”を紹介します。

南三陸町に帰郷。「鹿子躍」を発信！

中学2年生のときに東日本大震災を経験し その後、「鹿子躍」にのめり込んでいった青年が 2019年春、宮城県・南三陸町へ帰郷しました。 人生の節目の、躍りへの情熱あふれるメッセージです。

取材・文＝小久保よしの（P42－43）、近藤快（P44－45）
写真提供＝小野寺翔

小野寺翔

●小野寺翔（おのでらしょう）／「行山流水戸辺鹿子躍保存会」メンバー
1996年生まれ。小学校高学年から行山流水戸辺鹿子躍を始める。2019年春、『岐阜県立森林文化アカデミー』を卒業し、南三陸町へ帰郷。自伐型林業に携わりながら、躍りの継承者としても活動中。

元気をくれる躍り

「南三陸町の復興は、若い私たちに託されています」。2012年3月10日、南三陸町立戸倉中学校の卒業式で、答辞として僕はそう話しました。東日本大震災で津波の被害を受けたため、僕たちは隣接する登米市にある廃校を借りて、授業を受けていたのです。震災以降、僕のまちへの思いは高まっていました。

僕は、旧仙台藩領北部に伝わる鹿躍りの原型と言われる「行山流水戸辺鹿子躍（ぎょうざんりゅう・みとべししおどり）」を小学校高学年から始めました。希望制だったのですが、僕は魅せられたのです。まずビジュアルがかっこいいし、先輩たちの躍りを見ても「かっこいいなぁ」と（笑）。実際に始めると、太鼓をたたきながら躍るのはむずかしかったのですが、楽しいと感じました。

そして、あの震災が起きました。被害は「行山流水戸辺鹿子躍」にも。鹿頭や衣装、ササラ（鹿が背負う装具）、太鼓も、すべて流されてしまったのです。しかし、太鼓が泥のなかから見つかり、衣装やササラも出てきて、大人の躍り手たちは「またやれる！」と思ったそうです。

もともと鹿子躍は魔を退け、先祖を供養する躍りです。亡くなった人のために躍らないといけないんじゃないか、と感じました。供養のために、生きとし生けるもののために。そこで「今こそ躍りをやってみんなを励まそう！」と仲間の中高校生に声を掛け、集まりました。〝復活の舞い〟を披露したのは、震災から2か月後、登米市の「葉桜まつり」。いざ練習を始めたら、みんながすぐに元気になって、躍りが元気をくれたような感覚でした。この舞台を踏んで、「ああ、自分たちがつないでいかなくては！」と思ったのです。本格的に鹿子躍を開始して、大学生のときに「行山流水戸辺鹿子躍保存会」に入りました。

また、関東の大学へ進んだことで、東北の郷土芸能を都会などで伝える有志のグループ「東京鹿踊」に出会いました。鹿子躍の意味やまちのことを伝える活動もされていて、「躍り以外にも伝えられることがあるんだ」と学びました。

2018年3月、アジアと三陸を芸能でつなぐ交流事業「Sanriku-Asian Network Project（サンプロ）」の一環として、宮城県と岩手県にある3つの高校の芸能部に所属する高校生やOBと共に、僕はインドネシア・バリ島に行きました。

バリ芸能やバロン・ダンスなどを鑑賞したり、仮面舞踊（トペン）を習ったりして、伝統芸能が人々の暮らしと密接につながりあう様子を学び、鹿子躍の披露もしました。言語が通じなくても、郷土芸能を通じて自然に笑顔になって、コミュニケーションがとれ、躍りに祈りが込められているという共通点もあり、考え方は同じなんだなとも思いました（P74参照）。

2019年春、林業の学校を卒業し、南三陸町に帰ってきました。今後は、郷土芸能を通して地域のことを伝えたり、太鼓体験や装束体験なども開催したいです。南三陸町から、幅広く魅力を発信していきます。

プロジェクト概要は →P72～

「僕らが伝承する」。若者の決意と覚悟

畑中大河

●畑中大河（はたなかたいが）／「鮟神楽」演者　1998年、青森県八戸市生まれ。小学3年生のとき、同市鮟（さめ）町に伝承される「鮟神楽」を習い始める。以来、10年以上にわたって活動を続け、「三陸国際芸術祭」にも参加。現在は地元の『八戸学院大学』に在学中。

〝相棒〟と二人三脚で

「なんてかっこいいんだ」――。僕が初めて「鮟神楽」を目にしたのは、小学3年生のとき。校内で発表会があり、心を奪われました。すぐに習い始め、10年以上続けています。もう〝生活の一部〟になっていますね。

長く活動してきたわけですが、ここ3、4年で状況が激変しました。きっかけは、『NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク（JCDN）』の「習いに行くぜ！東北へ！」のプログラムで、ダンサーたちが「鮟神楽」を習いに来たことです。「習いに来るって？」と驚きましたが、興味を示してくれたのはうれしかったですね。

その後、今度は「三陸国際芸術祭」にも参加させてもらうことになったんです。2018年から2年続けて、三陸のほかの芸能団体やインドネシアの芸能グループと交流しました。インドネシアの舞踏「ジャティラン」の演技を見たときは、呆気にとられましたよ。身体能力が高く、日本人ではなかなかできないような動きをしていました。

今までは、地元で年に一度の発表会や祭りなどで演技を披露する程度でしたが、今はこれまでになく、「鮟神楽」を知ってくれる人が増えている実感があります。世界観が一気に広がりました。

これから先も、地元に残って「鮟神楽」を続けるつもりです。

師匠たちは60～70代が多く、僕らの少し上の30～40代は担い手がいないのが現状です。近い将来、僕らの世代が中心になって伝承していく必要があります。

正直、不安もありますよ。でも、頼もしい〝相棒〟がいます。小西佑典（ゆうすけ）です。小中学校の同級生で、これまでもずっと〝名コンビ〟として活動してきました。これからもコンビでやっていきたいですね。

「鮟神楽」は僕にとって〝生活の一部〟と話しましたが、これからは〝生活をかける〟くらいの気持ちで伝承活動に取り組み、「鮟神楽」の存在や魅力を多くの人に広めていく覚悟です。

プロジェクト概要は →P72～

【相互交流で三陸が世界に開いていく】

2 地元自治体・企業との連携を強化

2018年11月、『三陸国際芸術推進委員会』が発足しました。委員長には『三陸鉄道株式会社』の中村一郎代表取締役社長、副委員長には岩手県宮古市の山本正徳市長、大船渡市の戸田公明市長が就任。これまでは『ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク（JCDN）』や『国際交流基金アジアセンター』などを中心に運営されてきましたが、青森・岩手県の12自治体が加わった同推進委員会の発足により、さらに現地に根ざした活動になることが期待されます。

中村委員長は、「地元の自治体が一体となって郷土芸能をはじめとする文化・芸術を盛り上げていくことは、三陸の復興にとって大きな力になります」と強調。「アジアの芸能が三陸を訪れ、三陸の芸能をアジアに発信していく。そうした相互交流によって、三陸が世界に開いていくことを期待しています」と力を込めます。

MESSAGE MAR.9.2019 TO THE FUTURE

宮古の元気印より、未来への手紙

私、フェローから「防災活動家」になりました。

プロジェクト概要は →P66~

防災の“楽しさ”を伝える人になる——。そう力強く話すのは、岩手県宮古市出身の佐々木真琴さんです。持ち前のガッツと明るさで、新しい人生を切り拓いています。なぜ、防災なのか。その原点と、思い描く未来を聞きました。

取材・文＝近藤快　写真提供＝佐々木真琴

「防災は楽しい」の伝え手に

私はもともと、学校の先生から言われたことをそのまま遂行するような、典型的な優等生タイプでした。それが、東日本大震災後に一変します。アメリカの起業家と交流したり、日本でも各界のリーダーたちが集まるイベントなどに何度も参加したりしてきました。

転機の一つになったのが、『NPO法人プラス・アーツ』の理事長・永田宏和との出会いです。テレビ番組で共演したのをきっかけに、高校在学中に楽しく学ぶ防災教材をつくり、大学の4年間は『プラス・アーツ』でインターンを経験しました。2015年には、「HANDs！プロジェクト」に参加し、インドネシアやタイ、フィリピンの防災教育の現場を視察しました。

私にとって集大成になったのが、2019年3月に防災イベント「イザ！カエルキャラバン！」を「HANDs！プロジェクト」と組んで地元・宮古市で開催したことです。防災体験プログラムとおもちゃの交換会を組み合わせ、子どもたちに楽しく防災を学んでもらう企画です。「いつか地元でやりたい」と、高校生の頃から思い続けてきたことでした。アジア各国からも防災活動家たちが来日し、それぞれの防災プログラムを宮古の子どもたちにも体験してもらいました。とても盛り上がり、子どもたちは「もっとやりたい」と大きな声を上げていました。

イベントをサポートしてくれた地元の若者グループとも意気投合し、その後実際に、「イザ！カエルキャラバン！」の一部である「かえっこバザール」（おもちゃの交換会）が地元主導で開催され、今後も継続的にやっていくことが決まったんです。宮古だけでなく、これから三陸地域全体に広げていきたいですね。

写真右／宮古市で開催された「イザ！カエルキャラバン！× HANDs！Together」の様子。写真左上／佐々木さんは防災教育紙芝居をつくるなど、防災の楽しさを伝えています。写真左下／毛布で応急的に担架をつくるプログラムも、子どもたちに人気です。

防災を伝える“プロ”になる

私は、防災の楽しさを伝える“プロ”になりたいんです。

震災で幸い家族は無事でしたが、祖父母の家は津波で流され、親戚のおばあちゃんが命を落としました。「守れるはずの命が守れなかった」「逃げていれば、助かったのでは……」という思いが、今も頭から離れません。その悔しい思いが、私が防災の道を突き進む原点です。

今は『プラス・アーツ』のスタッフとして働いています。『プラス・アーツ』は、「防災は、楽しい。」をテーマに掲げているんです。防災は堅いもの、とっつきにくいものというイメージが強いですが、楽しく学ぶことから防災の“入口”を大きくすれば、一人でも多くの人の命を救うことにつながるはずです。防災の固定概念を壊していきたいですね。

28歳になったら地元に帰ると決めています。宮古にはカッコいい大人がたくさんいて、「一緒にまちを盛り上げよう」と声をかけてくれます。しっかり勉強して、伝える“プロ”として、防災はもちろん、宮古の魅力を多くの人に伝えていきたいですね。

●佐々木真琴（ささきまこと）／『NPO法人プラス・アーツ』スタッフ　岩手県宮古市出身。中学2年のとき、東日本大震災を経験。2015年、「HANDs！プロジェクト」に参加した。2019年4月、インターン先の「プラス・アーツ」に就職。「本州最東端のまち宮古PR隊」や東北の食材を提供する「きっかけ食堂」などにも加わる。

佐々木真琴

News!! 今もなお広がる DOOR to ASIAの輪

「DOOR to ASIA」の開催後、今もなお参加者たちの交流は続き、運営陣が「想定していなかった」と驚くほどさまざまな展開が生まれています。挑戦あり、再会あり、未来あり。ご注目を！

取材・文＝小久保よしの　写真＝門傳一彦（P50-51）、Design Center of the Philippines（P52）、小久保よしの（P53）　写真提供＝石渡商店（P48）、矢部幹治（P49）

D

プロジェクト概要は →P60～

Challenge 01 石渡商店の挑戦！ 海外展開へ

大きな存在のデザイナー

「DOOR to ASIA」に参加したことがきっかけで、2014年に海外販売を開始した「気仙沼完熟牡蠣のオイスターソース」を、2019年夏からインドネシアで販売することになりました。パッケージを変えて本格的に海外へ展開するのは初めてです。

実は、参加前は「外国人のデザイナーとは物事の考え方が違うんじゃないか」と思っていたんです。しかし、気仙沼の食文化や景色、自分たちの働き方を思いっきり吸収してくれ、「ものが人に伝わるプロセスは世界共通なのだ」と分かりました。熱心に弊社のことを聞いてくれ、信頼できる人だとも感じました。

終了後すぐにインドネシアに飛んでミーティングをし、一歩一歩進めていきました。インドネシアへは年間8回ほど行き、彼らの紹介で、現地でプロモーションをしたり、主婦の人たちと友達になったり、基礎固めをしたんです。アジア人デザイナーとは、ビジネスパートナーという以上に親密です。現地でコミュニケーションをとるときのサポートもしてもらっています。

また、商品を現地に輸出するために必要な許可や、さらにHACCP（ハサップ）という食品工場の国際衛生基準を満たすなどの準備に一年半ほどかけました。

新しいことにチャレンジするのはおもしろいです。もともと話すのが苦手なのですが、興味のあることについて人と話すのは好きなんです。知らないことが嫌なんですよ（笑）。興味を持ったことを調べるのがおもしろい。そこを覚えると頭のなかの引き出しが増えるから、今まで持っていたものと掛け合わせた新しい発想が出てくるんですよね。だから、できるだけやったことのないことにチャレンジするようにしています。

ジャカルタで販売を始め、スーパーや飲食店、自宅で料理をするケータリングシェフなどに紹介し、展開していく予定です。気仙沼でつくった商品を使ってくれた人から「おいしかったよ」と言われるようなサイクルが一つでもできれば、いただいたご縁やつながりに貢献できるのかなと思っています。

●石渡久師（いしわたひさし）／『株式会社石渡商店』代表取締役専務　1957年に祖父が創業したふかひれ加工販売業の3代目。2002年、家業を継ごうと決意し入社。父のもとで工場管理、商品開発などを学ぶ。東日本大震災後は『石渡商店』の大黒柱に。

インドネシアでのパッケージでは、日本語表記の一部をインドネシア語に。あえて日本語を残し、メイドインジャパンの商品だと伝わるよう工夫。インドネシアでは天然の旨味でフレッシュなものがなかなか手に入らないため、プロモーション活動で「気仙沼完熟牡蠣のオイスターソース」は好評だそう。

現地でのプロモーション活動の様子。「デザイナーには、こちらが意図している、伝わる言葉に変えてもらい、コミュニケーションの翻訳をしてもらいました。例えば『ミルキーオイスターソース』という名称の『ミルキー』は、日本では『濃厚でクリーミー』と捉えますが、アジア各国では食品上『ミルクが入った』という意味になってしまうんです」と石渡さん。今後は親子ブランドとなるオイスターソースを新規製造し、販売する予定。

02 Festival

箱根山フェスティバル

DOOR to ASIAから生まれた、未来につなぐお祭り

サウナカーも登場！

人生が変わった「DOOR to ASIA」

プレイベントのトークでは、参加した人たち数名が話をしました。『酔仙酒造』の村上雄樹さんは「DOOR to ASIA」を振り返って「予想以上の提案をしていただき、心強い味方ができたと思っています」と話しました。今後考えている陸前高田でのプランがあると発表し、「まちの人に喜んでもらえることをしていきたい。今日『（それを）早くやりたいな』と熱が上がってきました」と笑顔を見せました。また、インドのデザイナー、サミア・シンさんは「良い経験をさせてもらい、人生が変わりました。人生で何を成し遂げたいか、デザイナーとして私はどのような役割をしていくべきか、自分のゴールを考えさせられました」と語りました。

デザイナーが再来日

2019年3月23日、陸前高田市の『箱根山テラス』『気仙大工左官伝承館』『杉の家はこね』で開催された「箱根山フェスティバル」。このイベントは、2018年の「DOOR to ASIA」で『株式会社箱根山テラス』に提案されたコミュニティ・プラットフォーム「高田共和国」と、『酔仙酒造株式会社』に提案された酔仙のお酒と文化を楽しむ「多賀多まつり」の2つがベースとなって企画されたもの。つまり、「DOOR to ASIA」なしには誕生しなかった空間でした。

「DOOR to ASIA」には4年でアジアの11の国と地域から33名のデザイナーが参加しましたが、この日のためになんと17名が来日（招へいしたシェフを含む）したのです。自費渡航をした人も多数いました。プロジェクトメンバーの友廣裕一さんは「うれしかったです。彼らが『機会があればまた陸前高田へ行きたい』という思いを持ってくれている証ではないでしょうか」と話しました。デザイナーたちにとって、三陸は特別な場所になったのでしょう。

国際色豊かな鏡開きとカレー

アジア各国の気鋭のシェフたちから自己紹介とともに個性的な4種のカレーの説明があり、その後は日本の文化の一つ、『酔仙酒造』の新酒の鏡開きが行われました。デザイナーやシェフたちが、木槌を持って興味深そうに鏡開き。お祭りが始まると、早くもカレー販売に長蛇の列が。そして、人々の再会を喜ぶ声が会場に響きます。

「まちの未来をつくったよ!」

「箱根山デザインスクール」と題したデザイナーによるワークショップ。子どもたちと海外デザイナーがチームを組んで、4チームに分かれ、クレヨンや粘土、葉っぱなどを使い、まちの未来を想像&創造しました。つくりあげた完成物（写真左下）に、子どもたちはとても満足そう！「楽しかった」という声が聞こえました。

フィンランド式サウナ用の帽子づくり

とんがり帽子をつくる「サウナハットをつくろう」というワークショップが行われ、デザイナーたちも多数参加。使う材料は羊毛、石鹸、お湯だけ！ 自分だけのサウナハットをつくり、完成したらそのままフィンランド式サウナへ。気仙沼から特別に出動した移動式サウナカーで、本格的な薪サウナを楽しみました。

03 Project

7社のプロジェクトが進行中!

DOOR to ASIA 2015

【石渡商店（気仙沼）】
・生産現場から食卓に届くまでを紹介する映像の制作（シンガポールデザイナー（以下、D））
・インドネシア市場への商品販売、プロモーションのロードマップ提案（インドネシアD）
・デザイナーがシェフを紹介、シェフが気仙沼訪問、シェフがインポーターを紹介（インドネシアD）
・2018年8月5日の「気仙沼みなと祭り」に、インドネシアシェフが来日し、屋台料理をつくる（インドネシアD）

【スリーピークス（大船渡）】
・商品ラベル、ブランドコミュニケーションの提案（日本D）
・2018年キャッセン大船渡にワイナリーとショップをオープン。デザイナーが提案した「Three Peakers」という名の農業体験滞在プログラムの実現に向けて調整中（マレーシアD）

DOOR to ASIA 2016

【デクノボンズ（一ノ関）】
・ロゴデザイン、商品ラベル、パッケージなどを含めた全社デザインの刷新（マレーシアD）

【斉吉商店（気仙沼）】
・「Eat Together, Live Together」というブランドメッセージを採用（インドネシアD）

DOOR to ASIA 2017

【LAMP（陸前高田）】
・「米崎リンゴ」という地域ブランド認知のためのロゴデザインを2018年秋から使用（タイ&インドネシアD）

【ピースジャム（気仙沼）】
・NPO名と商品名が混同していたので役割を整理し、ブランドロゴ、商品ラベル、WEBサイトなどを制作中（台湾&フィリピンD）

【三陸とれたて市場（大船渡）】
・ブランドメッセージ、商品ラベル、パッケージデザイン、ブローシャーなどを刷新（インド&韓国D）

想定外の展開が広がり今もなお共に制作

2018年までに参加した事業者は15社。そのうちの7社が、「DOOR to ASIA」でチームを組んだデザイナーと制作物をつくるなど、さまざまな企画が進行しています。「ここまで広がるとは想定外でした」と、プロジェクトメンバーの矢部幹治さんは話します。

04 New areas

フィリピンや奈良など他地域でも開催!

認知度が高まり初めて海外で実施

三陸で開催後、奈良県の奥大和地域や長野県・小布施町でも開催されました。2019年には初めて海外にも“横展開”。4年間フィリピンからは毎年1名が「DOOR to ASIA」に参加し、その口コミや現地でのイベントなどを通してマニラのデザイナーの間で認知度が高まっていたからです。1月、バターン州でデザイナーたちが受け入れ側になってカスタマイズした「DOOR to ASIA in Bataan」が実施されました。

「太平洋戦争の負の歴史があるバターン州で、地元の方々と一緒に未来へ向けて考えるきっかけになりました」と、矢部さん。

Philippines

バターン州での開催を機に、他国のデザイナーも自国開催を希望。現在はタイ、インド、台湾、フィリピンのセブ島での開催に向けて動いています。

参加した日本人デザイナーたちは「言葉や文化が異なってもちゃんと伝わるものがつくれるというのは自信になった」と言っていたそう。

アートと大好きな陸前高田の未来

●日沼禎子（ひぬまていこ）／陸前高田AIRプログラム」ディレクター、『女子美術大学』教授　AIRを中心としたアーティスト支援、プロジェクト、展覧会を多数企画・運営。『緑と花と彫刻の博物館　ときわミュージアム』のアートディレクターなども務める。

海外から三陸にアーティストがやって来て創作活動をする「陸前高田AIRプログラム」。アートは、まちでどのような力を発揮するのでしょう。ディレクターの日沼禎子さんの思いを紹介します。

取材・文・写真＝小久保よしの

自分たちの生活がアートで価値あること?

AIR（アーティスト・イン・レジデンス）とは、アーティストに空間と場所と時間を提供し、アーティストはそこに滞在して創作をする活動です。私は1999年からAIRプログラムをコーディネートしてきましたが、東日本大震災後は「自分に何ができるのだろうか」と問いました。そこで自分自身はもちろん、アートのあり方も問い直すことで新しい未来をつくっていけるのでは――という願いを込めて2013年に「陸前高田AIRプログラム」を始めたのです。このプログラムは、陸前高田の経営者を中心として2011年10月に設立された復興のまちづくり会社『なつかしい未来創造株式会社』が運営していて、私はディレクターとして協力しています（P80参照）。

この会社の最も大きなプロジェクトとして始まり、オープンした宿泊施設が『箱根山テラス』です（P23参照）。『箱根山テラス』では地元の食材を使用したり、地元の木材のチップを使う「ペレットボイラー」の普及にも力を入れていますが、「陸前高田AIRプログラム」は地元の資源を活用し、新たな価値を創造することを目的にしています。アーティストは滞在中、地元の人々の生活に寄り添って創作活動をするのです。「陸前高田AIRプログラム」を始めたばかりの頃、アーティストのリサーチに協力してくれた地元のある方が、まだ日常を取り戻せない現実があるなかで「アーティストが私たちの生活の一部を『アートだ』と言ってくれたり、自分たちの生活を映像にして『価値あること』と思わせてくれた」とおっしゃったのです。そういう人が一人でも生まれるよう、生活のなかにある価値や人の力を、アートによって形にしていきたいと思っています。

2019年3月には「気仙／アートとライフをここに持ち寄る」を開催しました。アジアのアーティストが来日し、展示のほかに「気仙アート&ライフマルシェ」やワークショップも開きました。マルシェにみんなが並列で参加し、アーティストは食文化を提供する出店をしたのです。

今後陸前高田が、アーティストだけではなく、ものづくりや表現をするさまざまな人にとって大事な場所になったらいいなと考えています。アーティストたちが「人の暮らしにとって大事なものとは何か」「どのような力が必要なのか」を共に考えていける場をつくっていきます。

「シンガポールホール」（陸前高田市コミュニティホール内）での交流の様子。（「岩手日報」2018年12月11日付より転載）

【私の見た東北】
●アジア・文化人招へいプログラム

ポスト3・11の東北への旅
復興と再起の実態

Dr. Lam Peng Er
（ラム・ペンエ）

2

2018年12月、『国際交流基金アジアセンター』の協力により、10日間の東北視察が実現しました。私の目的は2つあり、一つは2011年3月に発生した地震、津波、原子力発電所のメルトダウンという三重の災害からの地域復興について学ぶこと、もう一つは被災地におけるシンガポールの人道支援について把握することでした。

東北視察は、まさに新たな視野が開ける体験でした。津波による破壊の規模、深刻さ、その悲劇には、本当に衝撃を受け圧倒されました。しかし、復興への粘り強い歩みのなかに、希望の兆しも見えました。胸に強く刻まれたのは、3・11の直後、地域コミュニティの再建に向け東北の人々が見せた底力と、比較的孤立していた地域が、世界各地から人々を受け入れるオープンな地域へと変貌した様子でした。復興に向けた超人的な努力は、間違いなく、日本人の再起力を反映したものという印象を受けました。しかしこの膨大な作業は、被災地の人々だけが背負うものではありませんでした。貧富を問わず世界中の国々が、東北の人道的必要と復興のために惜しみない支援を寄せました。このことは、多くの日本人にとって驚きだったようです。悲劇はときに人間の絆を強めるのです。

元復興大臣、岩手県と宮城県の県職員、岩手県立大学の研究者、復興庁と岩手復興局の職員、福島県相馬市、宮城県・七ヶ浜町、陸前高田市の首長、美術館の学芸員、「三陸国際芸術祭」のプロデューサー、工場が倒壊しゼロから事業を再建したしょうゆ商店の店主、陸前高田市に移住した若者などさまざまな方が、それぞれの3・11について率直に語ってくれました。その会話で分かったのは、物理的な復興よりも、生活や社会的なつながりが崩壊した地域コミュニティを再建するほうがはるかに困難であること。それでも人々は、絶望ではなく希望を持って、より良いコミュニティの再建に取り組んでいます。

しかし、東北が抱える長期的な課題を響きの良い言葉で濁しておくわけにはいきません。第一に、年齢を問わず多くの住民が今もなお、深い心の傷を抱えています。第二に、世界の多くの地域が、定期的に自然災害に見舞われていること。東北に集まっていた関心が、国内外のほかの地域へと徐々に移っていくのは避けられません。第三に、日本全土と同様に東北も急速な高齢化と人口減少の問題に直面しています。これらは地域経済、税収、社会福祉に深刻な影響を及ぼすでしょう。だからこそこうした地域は、国内の他地域から若い移住者を、さらには農業や漁業などの産業で働く海外労働者を引きつける創造性が必要です。第四に、数十年かかる可能性もある、原発と近隣地域の除染です。視察では、福島第一原発の1・5㎞圏内にまで足を運び、汚染された表土を除去する入念な作業を目にしました。

東北視察で最も記憶に残った3つの場面は何かと聞かれれば、それは、数百の緑豊かな島々が浮かぶ松島湾の絶景、陸前高田市のすてきな老夫婦のご家庭でのホームステイ（ご主人は、東北弁を私に教えてくれました）、そして、シンガポールの支援により建設されたコミュニティホールで地域の元気なお年寄りたちと踊ったことです。私の踊りが地元紙で取り上げられたことも、うれしい驚きでした。

陸前高田市、宮古市、相馬市、七ヶ浜町の皆さんとシンガポールとの間に特別な絆ができることを望んでいます。これらの地域は、シンガポール赤十字社による災害救助と人道支援の集中対象地域です。日本の東北にある地域と、東南アジアの都市国家との間に、思いも寄らず突然に友情が芽生えたこと、それこそが震災後の一筋の希望の光ではないでしょうか。災害と苦しみのなかで生まれた友情が続き、3・11の教訓が忘れられないことを望みます。それは教訓として、またインスピレーションとして、世界中で分かち合うべきであり、分かち合わねばならないのです。

《英語原稿を日本語に翻訳したものです。》

※「アジア・文化人招へいプログラム」とは――
「国際交流基金アジアセンター」が、ASEAN10か国において社会的・文化的に大きな影響力・指導力を有する一流の文化人・知識人を日本に招へいし、日本における異文化理解を促進するプログラム。

●ラム・ペンエ（シンガポール）／『シンガポール国立大学東アジア研究所』上級研究員。シンガポール外務・国防委員会の諮問委員を務めたほか、現在は新興東アジア共同体及び域内のカウンターパートを提唱するシンガポールのさまざまなコーディネーターを務める。音楽活動にも従事し、ミュージシャン、シンガーソングライターとしても活動する。

アジアセンター三陸での取り組み

『国際交流基金アジアセンター』は2014年の創設以来、東北・三陸地域において、郷土芸能やデザインを通じての地域創生、防災教育などの文化事業を主催および助成してきました。アジア地域との交流の場を通して知恵や体験を共有し、東日本大震災後の復興に文化の面で向き合うことを目指しました。5年間の一つの成果として、『アジアセンター』が協力する「三陸国際芸術祭」は、2019年に三陸沿岸の市町村や関係団体から成る推進委員会が発足。地域全体で世界とつながる機運で盛り上がっています。「三陸鉄道リアス線」が開通し、秋にはラグビーワールドカップが釜石でも開催、三陸が大きく飛躍するこの年、三陸におけるこれまでの取り組みを振り返ります。

ASIAcenter JAPANFOUNDATION

『独立行政法人国際交流基金アジアセンター』は、2013年12月、日・ASEAN特別首脳会議において日本政府が発表した「文化のWA（和・環・輪）プロジェクト～知り合うアジア～」を実行する組織として、2014年4月に『国際交流基金』内に設置されました。人と人とをつなぎ、ネットワークを広げ、アジアの新しい文化を共創することを目指しています。東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年に向けて、音楽、演劇、映画やスポーツから日本語教育、学術まで、さまざまな分野で事業を実施しながら、アジアの人々の交流活動を応援しています。

【PROJECT LIST】

○DOOR to ASIA

岩手県 大船渡市
陸前高田市
一関市
宮城県 気仙沼市

○HANDs！プロジェクト

岩手県 宮古市
宮城県 南三陸町
石巻市
東松島市

○Sanriku-Asian Network Project（サンプロ）

青森県 八戸市
階上町
岩手県 久慈市
田野畑村
岩泉町
大槌町
住田町
大船渡市
陸前高田市
宮城県 気仙沼市

○東北とアチェの被災地間交流

岩手県 大槌町
宮城県 気仙沼市
東松島市

○アーティスト・イン・レジデンスの取り組み

岩手県 陸前高田市

○シネマ・デ・アエル 特別文化プログラム

岩手県 宮古市

三陸国際芸術祭2019連携企画
「三陸×アジア」つながるプロジェクト

『国際交流基金アジアセンター』は、2015年より民俗芸能の盛んな三陸地域とアジアを「芸能によってつなぐこと」を目的に、アジアの芸能団と三陸地域との交流事業を実施してきました。これまでインドネシア、フィリピン、カンボジアより多くの芸能の担い手が三陸を訪れ、異国の芸能の類似性に驚き、継承の知恵を学び合い、たくさんの刺激を受けました。2019年はさらにアート、デザイン、映画、防災教育など、分野を横断する「『三陸×アジア』つながるプロジェクト」を同時開催。これまでの蓄積を生かし、地域のさらなる活性化につながることを目指しました。

① 未来との対話、三陸とインドネシア

（東北とアチェの被災地間交流）

インドネシア・アチェ州で震災復興と向き合う人々を三陸に招へいし、地域を巡りました。その体験をふまえ、三陸とアチェの人々がお互いの知見を共有するトーク会を実施。交流から生まれた気づき・共鳴を「未来との対話」として発信しました。おしるこやミー・アチェ、コーヒーなど、両地域の食を通じた交流も。

●主催／国際交流基金アジアセンター、NPO法人地球対話ラボ
●場所／気仙沼市、大槌町ほか

② HANDs！-Hope and Dreams-for みやこ！

アジアで活躍する防災活動家、社会活動家などを宮古市に招き、地元で活躍する人々とともに、地域や世代を越えて宮古の未来について考える交流トーク会を実施しました。子どもたちが楽しみながら防災知識を身につけられる体験イベントも。宮古市がさらにいきいきするための第一歩を踏み出しました。

●主催／国際交流基金アジアセンター
●共催／宮古市、宮古市国際交流協会、NPO法人プラス・アーツ
●場所／宮古市

③ 気仙：アートとライフをここに持ち寄る

（陸前高田におけるアーティスト・イン・レジデンスの取り組み）

公園や集会場、小学校の旧校舎を舞台に、展示やトークイベントのほか、子ども向けワークショップ、フリーマーケットを展開。マーケットには地元の食のほか、陸前高田に縁のある豪華ゲストも参加しました。国や地域を越えて、アーティストと住民がふれあい、日々の暮らしやコミュニティのあり方をともに考えました。

●主催／国際交流基金アジアセンター、なつかしい未来創造株式会社
●場所／陸前高田市

【2019年2月9日~3月24日】

④ DOOR to ASIA 箱根山フェスティバル

アジア4か国のシェフがつくるカレーと地元の食や酒による饗宴のほか、アート・デザインやさまざまなアクティビティが楽しめる1日限りの祭りを開催しました。プレイベントとして、過去4年間に制作・提案されたコミュニケーションデザインの展示紹介、これまでの参加デザイナーと事業者が集いトークイベントも。

●主催／箱根山フェスティバル実行委員会（箱根山テラス、酔仙酒造株式会社、DOOR to ASIA）、国際交流基金アジアセンター ●特別協力／pensea Next Switch、株式会社長谷川建設 ●場所／陸前高田市、気仙沼市

⑤ シネマ・デ・アエル 特別文化プログラム「三陸とアジア、復興と再生の旅路」

宮古市に残る江戸時代の商家、旧東屋（あずまや）酒造店の蔵に設けられた、文化創造拠点「シネマ・デ・アエル」を舞台に、監督をゲストを迎えての映画上映や、まちづくりに関する文化プログラムを実施。

●主催／国際交流基金アジアセンター、シネマ・デ・アエル プロジェクト ●場所／宮古市

DOOR to ASIA

三陸でのデザイナーズ・イン・レジデンス

アジア各地より招いた新進気鋭のデザイナーが、東北地方に一定期間滞在し、地元事業者とデザイナーの出身国をつなぐコミュニケーションデザインを制作するプログラム。2015年に開始し、三陸で15の事業者、アジア11の国と地域から33名のデザイナーが参加しました。

デザイナーは2〜3名ずつに分かれ通訳スタッフと共に事業者の家に3日間ホームステイし、対話や視察を通して事業や地域、事業者自身への理解を深めながら、商品が生まれる過程や、その背景にある地域への思い、ものづくりへのこだわりなどを肌で感じとります。続く3日間で、事業者の事業・商品を「自分の国で売るとしたら」というテーマで、コミュニケーションデザインを制作。滞在最終日、制作したデザインのプレゼンテーションを行います。まるでデザイナーから事業者へ感謝の思いを込めた手紙を手渡すような瞬間です。

滞在中はコーディネーターが日夜議論を重ねながら、デザイナーたちをさまざまな面から支えます。事業者にとっては、海外のデザイナーとの交流が地域固有の価値や、自らの事業・商品の強みを新たな視点から捉え直す契機となり、海外に進出するきっかけを生み出しています。デザイナーにとっては、東北の文化を知ると同時に、アジアの共通課題である「地方創生」や「自然災害」においてデザインが果たし得る役割を実践的に学ぶ体験となっています。

共催＝独立行政法人 国際交流基金、一般社団法人 つむぎや
写真＝門傳一彦、樽見星爾、新田理恵

「DOOR to ASIA」の舞台となる『箱根山テラス』。
広田湾を臨む大きなテラスでデザイナーたちが日夜語り合い、制作に没頭する。

デザイナーからの提案：2015年

【2015年12月1日〜12月12日】

① アンカーコーヒー［コーヒーチェーン］

海外展開に向けたブランディングと、気仙沼に住むインドネシア人や外国人観光客に向けたフリーペーパーをつくり情報発信基地に。

●場所／宮城県気仙沼市
●デザイナー／Dan Matutina（フィリピン）、Zinnla Nizar-Somplie（インドネシア）
●コーディネーター／西藤憲佑

② 株式会社石渡商店［ふかひれ加工販売］

山と海の栄養で育つ完熟カキ。アジアの富裕層をターゲットに定め、高級レストランのシェフなどに向けた広報ツールの提案。

●場所／宮城県気仙沼市
●デザイナー／Adityayoga（インドネシア）、Jonathan Yuen（シンガポール）
●コーディネーター／矢部幹治

③ 株式会社八木澤商店［しょうゆ醸造蔵］

震災で失われたと思われたが奇跡的に見つかった秘伝のもろみ。その「奇跡のもろみ」から搾るしょうゆの旨さを伝える。

●場所／岩手県陸前高田市
●デザイナー／Mali Chaturachinda、Pomm Jitpratuk、Thirada Raungpaka（以上タイ）●コーディネーター／飯田麻衣

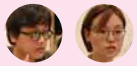
④ 株式会社スリーピークス［米崎りんご］

ワインやりんごジュースの製造・販売を通して大船渡の文化をつなぐ。デザインとキャッチコピーで多岐にわたる活動を応援。

●場所／岩手県大船渡市
●デザイナー／Driv Loo（マレーシア）、樽見星爾（日本）
●コーディネーター／加藤雅元

2016年
【2016年9月8日〜9月20日】

⑤ 株式会社男山本店 [日本酒]



五感を駆使し、アート作品を生むような酒づくり。自然と人、人と人をつなぐ「気仙沼の希望」としての価値をデザインで表現。

●場所／宮城県気仙沼市
●デザイナー／Giang Nguyen（ベトナム）、Hezin O（韓国）
●コーディネーター／矢部幹治

⑥ 株式会社斉吉商店 [水産加工]

気仙沼の豊かな海の恵み、食卓を囲むことで強まる家族の絆。東北の暮らしの豊かさを、経済的に急成長するアジアに伝える。

●場所／宮城県気仙沼市
●デザイナー／Rege Indrastudianto（インドネシア）、Ryan Len（シンガポール）
●コーディネーター／樽見星爾

⑦ 株式会社デクノボンズ [菜種油]

ロゴやパッケージのデザイン、ブランディング提案のほか、個人で頑張る事業主の慎吾さんと大切な家族へのメッセージ。

●場所／岩手県一関市
●デザイナー／Ellie See（マレーシア）、Russell Vergara（フィリピン）
●コーディネーター／加藤雅元

⑧ 陸前高田市商工観光課

陸前高田の魅力を次の世代に伝えるには。語り部や市民劇団創設、メッセージ性を強めるキャッチフレーズの提案。

●場所／岩手県陸前高田市
●デザイナー／Pat Laddaphan（タイ）、小板橋基希（日本）
●コーディネーター／デニス・チア

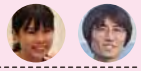
2017年
【2017年8月22日〜9月2日】

⑨ 有限会社三陸とれたて市場 [冷凍海鮮食品]

瞬間冷凍で魚介の旨みを最大限に引き出す、クールな最先端技術。その根底にある自然の豊かさとつくり手の温かみを表現。

●場所／岩手県大船渡市
●デザイナー／In-ah Shin（韓国）、Sudeep Chaudhuri（インド）
●コーディネーター／デニス・チア

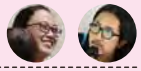
⑩ 株式会社横田屋本店 [水産加工（海苔ほか）]



300年の歴史を誇るブランドイメージを生かしつつ、若い世代を引きつけるデザインと商品システムを提案。

●場所／宮城県気仙沼市
●デザイナー／Magdalene Wong（マレーシア）、Sun Xiaoxi（中国）
●コーディネーター／廖品淨

⑪ NPO法人 ピースジャム [地域の母親たちの就労支援、子どもを通した地域コミュニティづくり]



地域の母親を支えつつ、コミュニティづくりにも取り組む。他地域でも展開できるようなアイデンティティシステムを提案。

●場所／宮城県気仙沼市
●デザイナー／Jay Guan-Jie Peng（台湾）、Roxy Navarro（フィリピン）
●コーディネーター／Yu-Hsuan Tsai

⑫ NPO法人 LAMP [りんご農園]

社会に適応しづらい人たちを農業を通してサポートするりんご農園。米崎りんごの認知度向上のため、りんご栽培の魅力を伝える。

●場所／岩手県陸前高田市
●デザイナー／Grittiga Prasitsiriwongse（タイ）、Jefferson Edri（インドネシア）
●コーディネーター／Rahul Gupta

DOOR to ASIAを支える主なメンバー

2018年
【2018年7月24日〜8月4日】

《企画運営》

●**友廣裕一**
（企画運営／一般社団法人つむぎや 代表理事）

●**矢部幹治**（デザインコーディネーター／エージェント・ハムヤック株式会社 代表）

●**加藤雅元**（現地コーディネーター／一般社団法人アスパック協会 理事）

●**樽見星爾**
（グラフィックデザイナー）

●**門傳一彦**
（映像制作・フォトグラファー）

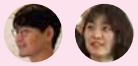
●**森孝幹**（アドバイザー／株式会社デザインフォース・JPDA国際交流担当理事）

《通訳&コーディネーター》

左上から右へ　**デニス・チア**（株式会社バウンレス 代表）／**飯田麻衣**／**廖品淨**／**Yu-Hsuan Tsai**／**Rahul Gupta**／**大宮綾佳**／**中村詩織**／**吉川舞**／**高品万紀子**

2017年の参加メンバー。事業者やOB・OGのデザイナーと共に。

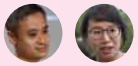
⑬ 酔仙酒造株式会社［日本酒］



陸前高田の風土から生まれた地酒を広めることで地域に貢献したい。イベントやギフトを通じ酒と共に幸せを広める。

●**場所／岩手県陸前高田市**
●**デザイナー／Techit Jiro（タイ）、Woo Yunige（韓国）**
●**コーディネーター／中村詩織**

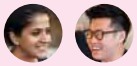
⑭ 株式会社カネマ［鮮魚卸売・水産加工］



歴史と共に築き上げた魚の品質を見極める技術力。気仙沼から「目利きのカネマ」の真髄を世界に向けて発信する。

●**場所／宮城県気仙沼市**
●**デザイナー／Danis Sie（インドネシア）、Desiree Niu（台湾）**
●**コーディネーター／吉川舞**

⑮ 株式会社箱根山テラス［宿泊・交流施設］



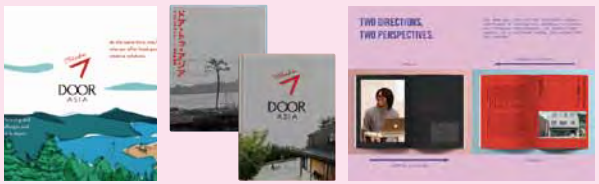
「DOOR to ASIA」の舞台。アートや自然、食を通して新たな価値を発見し、くり返し訪れたくなる「高田共和国」の提案。

●**場所／岩手県陸前高田市**
●**デザイナー／Samia Singh（インド）、Yap Weng Nam（マレーシア）**
●**コーディネーター／デニス・チア**

⑯ DOOR to ASIA

参加者を魅了し、働き方、生き方までをも変えてしまう「DOOR to ASIA」の魅力とは? その秘密に迫る、扉のような本。

●**デザイナー／Nelson Ng（中国）、Dang Sering（フィリピン）**
●**コーディネーター／デニス・チア**



HANDs！プロジェクト

「未来の防災」を担う人材を育てる

楽しみながら学べて地域に根付く、新しい形の防災教育を広めるリーダーを育てる、人材育成プロジェクトです。これまでにインド、インドネシア、カンボジア、タイ、ネパール、フィリピン、マレーシア、ミャンマー、日本の9か国から、防災に高い関心を持つ若者を「フェロー」として育成してきました。フェローは2年間のプログラムで、3～4か国での研修（スタディツアー）を行い、訪問地の取り組みをじかに見て、相互に学び合います。2015年、2016年には東北地方も訪れました。ツアーではディスカッションを重ね、発想力や問題を解決する実践力を磨き、ツアーの体験やその後のリサーチをもとに、防災教育プロジェクト（アクションプラン）を企画します。ただアイデアを出すだけではありません。地域の課題を特定し、その解決に向けクリエイティブな発想で、地域の人々の希望となるようなプランを立ち上げます。2014年の開始から現在までに約100名のフェローが誕生し、約27のアクションプランを実施、9万人以上に防災教育の種を届けてきました（2019年1月現在）。

2018年からは、フェロー同士のネットワークをさらに強め、アジア地域に防災活動がより深く根付くことを目指す「コラボラティブ・アクション・チャレンジ（CAC）」がスタート。

2020年を一つの目標に、「HANDs！プロジェクト」で育ったリーダーたちが、国を越えたネットワークを構築することを目指します。

主催＝国際交流基金アジアセンター
共催＝NPO法人プラスアーツ

新たに始動するプロジェクト「コラボラティブ・アクション・チャレンジ（CAC）」に向けて、これまでのフェローが一堂に会した様子（2018年8月、バンコク）。

アクションプラン

地域に新しい防災プロジェクトを根付かせる

DEEL

物語やゲーム、アニメーションを通して、コミュニティや家族の自然災害に対する防災能力の向上を図る。

●開催／フィリピン サンタ・クルス、タナウアン、レイテ島 ●期間／2015年10月～ ●アウトリーチ／サンタ・クルスに住む約600人 ●フェロー／Joseph Keith D. Anicoche、Maria Julie Anne T. Culibar（以上フィリピン）、Panida Tancharoen（タイ）

KIDSASTER MOVIE TELLER

高校生を対象に、映画の撮影・編集の技法と防災知識を学ぶワークショップを開き、防災をテーマとした短編映画を制作。

●開催／インドネシア スラバヤ、東ジャワ、ジョグジャカルタの高校 ●期間／2015年11月～12月、2016年3月 ●アウトリーチ／高校生165人 ●フェロー／Dhiptya Wijayanti、Fauzan Abdillah、Larasati、Rory Santoso、Vina Puspita（以上インドネシア）

KIDSASTER – EDUAKSI -

自然災害の多いインドネシアの子どもたちに、時間割やカレンダーなど身近なものを使って防災の知識を伝える。

●開催／インドネシア スラバヤ、東ジャワ、ジョグジャカルタの小中学校 ●期間／2015年11月～12月、2016年3月 ●アウトリーチ／子ども300人 ●フェロー／Dhiptya Wijayanti、Fauzan Abdillah、Larasati、Rory Santoso、Vina Puspita（以上インドネシア）

Children Safety Learning Games

ボードゲームや的あて、レスキューゲームなど、8種類のゲームを通して、防災訓練や救助活動を楽しみながら体験。

●開催／インド ビハール州パトナ
●期間／2016年3月
●アウトリーチ／6000人
●フェロー／Vishal Vasvani（インド）

アクションプラン
地域に新しい防災プロジェクトを根付かせる

StarSide Project

地震や津波で被災した小中学校を訪問し、子どもたちが楽しく体を動かしながら学べる、防災教育イベントを実施。

●開催／インドネシア　東ジャワ州、アチェ州
●期間／2016 年12月～ ●アウトリーチ／子ども349人
●フェロー／Eva Bachtiar、Ibnu Mundir、Sakti Bimanta（以上インドネシア）

Community Disaster Risk Reduction

大規模な災害を体験しながら、十分な備えができていない村を対象に、地元大学と協力して減災ワークショップを実施。

●開催／タイ　チェンライ ●期間／2016年1月
●アウトリーチ／ワークショップ参加者32人、間接的に村の全130世帯292人
●フェロー／Sirinon Suwanmolee（タイ）

The Adventures of Bunny & Nao

若い世代を対象にしたカードゲーム付きの体験型防災コミック。読み進めるうちに災害や防災への知識が自然と身につく。

●開催／インドネシア ●期間／2016 年5月～
●アウトリーチ／100人
●フェロー／Bonni Rambatan、Naomi Saddhadhika Satiawan（以上インドネシア）

HAND BAG

非常時に防災グッズにもなる勉強道具入りのバッグをろう学校の子どもたちに配布し、身を守るための知識も伝える。

●開催／フィリピン　ボホール島ルーンのろう学校
●期間／2016年11月 ●アウトリーチ／ろう学校の生徒100人
●フェロー／Tristan Nodalo、Margaret Buenconsejo Chavez、Ace Victor Aceron（以上フィリピン）

Open Space+

自然災害が頻発するミャンマーで、4日間の防災ワークショップを実施。地域における防災意識の向上を目指す。

●開催／ミャンマー　ヤンゴンのニュー・ゼロ・アートスクール、アートスペース ●期間／2017年3月 ●アウトリーチ／子ども100人、大人30人
●フェロー／Arisara Pittayayon、Suwimol Sereepaowong（以上タイ）、Aung Lin Hein、Salai Thawng Hlaing Lung（以上ミャンマー）

Knowpal（Knowledge + Penpal）

ネパール大地震で被災したカトマンズの学校と、そのほかの地域の生徒が文通により被災の経験を共有。心の絆を育む。

●開催／ネパール　カトマンズ
●期間／2017年6月～12月
●アウトリーチ／800人の子どもと50人の教員
●フェロー／Bijay Kumar Shahi（ネパール）

SMART（School Medical And Rescue Training）

英NGOの協力も得て、中学生と僧院学校の生徒を対象に、3日間のクリエイティブな防災研修を実施。

●開催／ネパール　カトマンズ
●期間／2017年11月　●アウトリーチ／スカウト活動に参加する生徒および僧院の生徒375人
●フェロー／Pranab Man Karmacharya（ネパール）

ECO Champion!

環境保全リーダーを育成するキャンプ。知識や技術の習得のほか、将来的に地域間で協力し合える関係づくりも。

●開催／タイ　チェンライ
●期間／2018年2月
●アウトリーチ／若者33人
●フェロー／太田祥歌（日本）

アクションプラン
地域に新しい防災プロジェクトを根付かせる

Explore Tohoku

青森県八戸市から福島県相馬市までの沿岸をつなぐ「みちのく潮風トレイル」を歩き、東北の魅力を英語で世界に発信。

●開催／日本　東北地方
●期間／2017 年5月～10月
●アウトリーチ／SNSでのべ5万人、講演で学生55人
●フェロー／Robin Lewis、福原恵（以上日本）

ごみゼロゲーム ～ごみを救え!～

「ごみ」も生かせば「資源」になる！カードゲームでごみ問題の予防策を楽しく学ぶ。

●開催／日本　●期間／2017年6月～2019年1月
●アウトリーチ／42人。製品化に向けたクラウドファンディングを達成し、増加中。
●フェロー／坂野晶（日本）

Mobile Radio Station

情報伝達が重要な災害時に役立つ、持ち運び可能なラジオ局のキット。設置方法も含めて伝える。

●開催／インドネシア　ジョグジャカルタ
●期間／2018年3月
●アウトリーチ／30人
●フェロー／瀬戸義章（日本）

FLAGO

海と共に生きていく未来を築くために。津波から身を守る「生き抜く力」を養う知育ゲーム。

●開催／日本
●期間／2018年6月～2019年3月
●アウトリーチ／128人
●フェロー／田中美咲（日本）

コラボラティブ・アクション・チャレンジ
アクションプランの経験をさらに拡大・発展

ARC（Art for Resilient Communities）プロジェクト

災害に強く、かつ環境にも優しいコミュニティづくりを目指すアートプロジェクト。東南アジアの小さな島の住人を対象に、立体地図模型づくりによる地域災害リスクの啓発、地域の写真を撮りマッピングすることによる環境情報の把握、ごみからパペット人形や楽器をつくるワークショップを行っています。自然災害の多い地域で活動するフェローたちと連携しながら、これまでのコミュニティ活動から得た知見を生かしつつ実施していきます。

●開催／インドネシア、タイ、フィリピン
●期間／2018年10月～
●フェロー／Gilang Damar Setiadi（インドネシア）、Hin Sinat（カンボジア）、Chonlada Janpum、Phongthep Bunka、Praewponn Sukutsathian、Worawas Sabaychai（以上タイ）、Juan Miguel Torres、Ralph Cabinta Lumbres（以上フィリピン）、坂野晶（日本）

写真右上・下／地域で撮った写真を使い、環境への理解を深める。写真左上／ごみからつくった楽器を演奏する子どもたち。

Sanriku-Asian Network Project

東北とアジアを芸能で結ぶプロジェクト

三陸沿岸地域には数多くの郷土芸能が根付き、幾世代もの伝承を経て、今も脈々と受け継がれています。その魅力を世界に向けて発信し、同時に、アジア各地に根付く多くの芸能との交流を生み出すことを目的に、2014年から「三陸国際芸術祭」が開催されています。コンテンポラリーダンスとの交流も行うほか、プロ・アマ問わず誰でも郷土芸能を体験できるプログラム「習いに行くぜ！東北へ！」など、さまざまな角度から郷土芸能を見たり、触れたりできる機会を提供しています。

『国際交流基金アジアセンター』は2015年から同芸術祭と連携し、三陸とアジアにおける芸能の交流を促進してきました。芸術祭の期間だけでなく年間を通して、三陸とアジアを芸能でつなぐプロジェクトを実施。アジアの芸能団体を招へいし、地域に滞在しながら三陸の郷土芸能団体と交流し、互いの芸能の成り立ちや、動き、音楽などさまざまな角度からお互いを知りあう機会となっています。三陸からも複数の郷土芸能団体が芸能の盛んな地域を訪問。各地域に根差した芸能のあり方や、伝承の方法などをじかに知ることにより、自分たちの地域の将来に向けた構想を考えることにもつながっています。

三陸とアジアの芸能には共通点も多く、時間をかけて交流を重ねるなかで互いに知り合い、学び合い、共通点を生かしながら、新しい演目をつくる試みにも挑戦しました。

共催＝三陸国際芸術推進委員会、NPO法人ジャパン・コンテンポラリー・ダンス・ネットワーク（JCDN）
協力＝国際交流基金アジアセンター
写真＝井田裕基、小原孝博、森隆宣、みんなのしるし合同会社

法霊神楽（三陸国際芸術祭 、八戸 2016年）

三陸国際芸術祭 in 六本木アートナイト 2016

新しいアジアの芸能をつくる試み

「シシの系譜」

「臼澤鹿子踊」と芸能を通して交流を重ねてきたバリの「バロンダンス」が、日本のコンテンポラリーダンサーと共同制作に取り組みました。2014年に鹿子踊を習ったコンテンポラリーダンサーが、鹿子の動きをもとに独自のダンスを模索し、異なる文化のシシたちが出会うというコンセプトでつくりあげた作品です。音楽は日本のガムラン楽団が担当しました。「2年にわたる相互交流で太い絆ができ、臼澤鹿子踊400年の歴史に新たに輝かしい1ページとして加えることができました」（東梅英夫氏）。

※シシ…獅子舞の獅子、バリ島では聖獣、臼澤鹿子踊では鹿を指します。

●上演／2016年10月22日 ●場所／六本木ヒルズアリーナ
●出演／臼澤鹿子踊保存会（岩手県・大槌町）、バロンダンス（インドネシア・バリ島）、トゥラン・ブーラン（ガムラン楽団）、荒内琴江、小泉ちづこ（以上バリ舞踊）、今津雅晴、磯島未来（以上コンテンポラリーダンス）
●ディレクション、構成、原案、音楽／櫻田素子（ガムラン奏者）
●主催／NPO法人JCDN ●協力／国際交流基金アジアセンター

日本人ガムラン楽団の演奏にあわせ、三陸、バリ、コンテンポラリーと、それぞれ異なる文化背景をもつ「シシ」たちが、六本木を舞台に競演した。

三陸の芸能がアジアの芸能と出会う

被災地の芸能をアジアへ派遣するプログラム

気仙の芸能、インドネシアの芸能と出会う

大船渡市より、郷土芸能の次世代を担う若手6名がバリ島とジョグジャカルタを訪問。同じ若年層が活躍する現地の芸能団との競演や交流を行いました。2006年のジャワ島中部地震の震源地となった村も訪れ、お互いの被災体験を共有し、共感し合う場面もありました。

●期間／2017年2月24日〜3月4日
●場所／インドネシア　バリ島、ジョグジャカルタ
●参加者／大船渡市在住の郷土芸能伝承者:松川直史、佐藤光春（笹崎鹿踊）、金野昭博（永浜鹿踊）、近江啓吾（下権現堂・前田権現舞）、鈴木昭司（石橋鎧剣舞）、横道毅（地の森権現舞）

1

2

3

4

1.ジョグジャカルタ国立芸術大学で笹崎鹿踊を披露。2.永浜鹿踊を披露。3.被災したバントゥール県の村で子どもたちからガムランを習う。 4.サンギンガン村の子どもたちと。

大槌からインドネシアへ（臼澤鹿子踊）

臼澤鹿子踊保存会の主要メンバーが、バリ島と2004年の震災から復興を遂げつつあるバンダ・アチェを訪問。アチェでは、2015年9月に「三陸国際芸術祭」を通して交流を深めた芸能集団コミュニタス・アル・ハヤと再会。「異国の地で再会できるというのは、考えにもつかない素晴らしい財産となった」（東梅英夫氏）。

●期間／2015年12月12日〜12月18日
●場所／インドネシア　バリ島、バンダ・アチェ
●参加者／東梅英夫、菊池務、上野武夫、臼澤孝一、東谷一二三、三浦貴志、土橋綾菜（臼澤鹿子踊保存会）

1

2

1.バリで鹿子踊を披露。2.アチェで再会したコミュニタス・アル・ハヤのメンバーと共に。

高校芸能部、インドネシアへ

宮城と岩手の3つの高校の芸能部に所属する高校生とOBの7名がバリ島を訪問。バリの踊り手や学生に東北に伝わる鹿子躍を披露し、お互いが伝承する芸能について意見を交わしたほか、言葉の壁を越えて芸能で通じ合う体験をしました。「異文化の交流を体感する瞬間は、とても平和で幸せな時間になっていた」（小野寺翔氏）。

●期間／2018年3月23日〜3月30日　●場所／インドネシア　バリ島
●参加者／小野寺翔、佐々木一磨（以上、行山流水戸辺鹿子躍保存会）、山田柚希、加藤奏、鈴木凪紗（以上、岩手県立大東高等学校行山流鹿踊部）、渡辺きあな、高橋花（以上、岩手県立岩谷堂高等学校鹿踊部）

1

2

1.鹿踊の太鼓を披露。 2.バリの豊かな緑に囲まれ練習。 3.インドネシア国立芸術大学デンパサール校での交流。4.バロン・ダンサーと。5.ウブド第一高校の学生と。 6.ガムラン・グループ「スダマニ」と。

3

4

5

6

アジアの芸能を三陸へ
「三陸国際芸術祭」での交流

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

『国際交流基金アジアセンター』は「三陸国際芸術祭」にアジア各地から多彩な芸能団体を招き、三陸の芸能団体との競演や、市民との交流を促進してきました。来日した芸能団体の一部を紹介します。

1 アムリタ・パフォーミング・アーツ
（カンボジア　プノンペン）
カンボジアの伝統的パフォーミング・アーツを復興し、ダンサーの育成やコンテンポラリーダンスの振興に努める。
●来日／2015年

コミュニタス・アル・ハヤ
（インドネシア　バンダ・アチェ）
2004年のスマトラ島沖地震と大津波により甚大な被害を受けたバンダ・アチェで、芸能でまちを元気にしようと結成。
●来日／2015年

コミュニタス・ティカール・パンダン
（インドネシア　バンダ・アチェ）
スマトラ沖地震後、人々の心の復興を目指すアート・イベントを企画。郷土芸能の復興を目指した支援も行う。
●来日／2015年

2 マルティヌス・ミロト
（インドネシア　ジョグジャカルタ）
5歳よりジャワ伝統芸能を学び、コンテンポラリーダンスの振付家、俳優、ダンス講師として世界で活躍する舞踊家。
●来日／2015年、2016年、2019年

マスク制作　スポノ
（インドネシア　ジョグジャカルタ）
代々ジャワの伝統舞踊の仮面をつくる職人の家系に生まれ、幼い頃から父や祖父のもとで仮面づくりを学ぶ。
●来日／2015年

3 フィリピン国立芸術高校
（フィリピン　マニラ）
ラグナの雄大なマキリン山の中腹に位置する、学校の形態をもつダンス一座。伝統的な民族舞踊の振興に努める。
●来日／2016年

4 パプア民族音楽グループ・エユセル
（インドネシア　パプア）
パプアの民謡を愛する若者たちにより設立。先人の足跡をたどり、彼らの思いやパプア民謡を世界中に広める。
●来日／2016年

5 サンガル・スニ・マリシン
（インドネシア　パプア）
パプアの伝統的民族舞踊を継承していくため、西パプアのジャヤプラで1988年に設立された。
●来日／2016年

6 バロンダンス
（インドネシア　バリ）
バリ島に伝わる獅子、聖獣。災いを防ぐ力を持つとされ、現在は寺院の祭りのほか観光客向けの公演も行われる。
●来日／2016年

7 チルボン仮面舞踊
（インドネシア　インドラマユ）
ジャワ島西部の都市チルボンで発展した芸能で、「バンジ王子」説話の登場人物を演じ分ける。
●来日／2017年

8 バジャウ族伝統舞踊
（マレーシア　センボルナ）
フィリピン南部からインドネシア東部の海峡に暮らす。速いリズムの音楽と対照的にゆっくりとした踊りが特徴。
●来日／2017年

9 クリンチン・マニス
（インドネシア　ジョグジャカルタ）
ジョグジャカルタ初の女性舞踊家によるランパック・ブト団体。芸術大学のメンバーが主となり2012年に設立。
●来日／2019年

10 ニュー・ズグス・グデュッルッ
（インドネシア　ジョグジャカルタ）
男性によるランパック・ブト団体。グデュッルッ（荒々しい踊り）を取り入れ、革新的な踊りをつくりだした。
●来日／2019年

東北とアチェの被災地間交流

『地球対話ラボ』の取り組み

『NPO法人地球対話ラボ』は、遠く離れた場所で暮らす人と人を、インターネットテレビ電話で結び、対面・双方向・ライブでコミュニケーションを行う「地球対話」に取り組んでいます。東日本大震災後は宮城県東松島市の小学校と協働し、2004年のスマトラ島沖地震で大きな津波被害を受けたインドネシア・アチェとの交流を続けてきました。『国際交流基金アジアセンター』は、2016年よりこれらの事業に対して助成しています。アチェで子どもの頃に被災し支援を受けた世代が、今では大学生となり、本事業に参加して日本の子どもたちをサポートする、という支援の循環も生まれています。つらい経験を乗り越えながら成長し、東北の子どもたちを元気づけたいと、日本へやって来るアチェの若者の姿は、被災した子どもたちにとって未来を感じさせる存在となっています。

2017年にはアチェにおいて、コミュニティアートの手法を用いて震災を伝えていくため「アチェ・コミュニティアート・コンソーシアム」を設立。アーティストや教育関係者など多様なメンバーが参加しています。日本とインドネシアのメンバーが、国や地域を横断しながらコミュニティアートを制作し、それまで「当然」と思っていた自分たちの文化を「外」の視点から見つめ直すことにより、さまざまな気づきや共鳴が広がっています。

主催・写真提供＝NPO法人地球対話ラボ

写真上／宮城県登米市北方小学校での交流。
写真下／インドネシア・アチェの震災遺構 Kapal KPLP。

宮戸小学校とインドネシア・アチェとの子ども国際交流

海の向こうの子どもたちとの対話は、宮戸島の特色を伝えようと、地域を見つめ直すきっかけになりました。子ども時代に被災したアチェの大学生が来日した際には、宮戸小の児童たちが制作した壁画「10年後の宮戸島」に感銘を受けるとともに、図画工作のもつ力を実感し、アチェでも同じテーマ、手法で壁画を描くことに。未来を考えることの大切さを共有しました。双方の壁画はアチェ津波博物館に展示されています。

●期間／2012年～ ●アジア・市民交流助成／2016年度

1.10年後の宮戸島。2.10年後のアチェ。3.アチェの若者（左から2人目）に質問。

被災地ツーリズムの可能性を探るラビラビアートツアー

市民の足として利用される安価な乗り合いバス「ラビラビ」。このラビラビに乗って、バンダアチェ市内の震災遺構とアートプロジェクトを巡るツアーを実施。ガイドを通して日本のことを知るきっかけになったほか、アチェの人が地元の新たな一面を知ることにもつながりました。

●期間／2017年～
●アジア・文化創造協働助成／2017年～2019年度

ラビラビ車内の様子

アチェと日本、食の交流アチェで仙台雑煮をふるまう

仙台の復興住宅で、毎月開催している食の交流「おしるこカフェ」。アチェでは、仙台雑煮をつくりふるまいました。地域固有の食文化と参加者のもつ豊かな経験が溶け合い、会話が広がります。食を通して、コミュニティとより親密な関係性が築かれました。

●期間／2018年～
●アジア・文化創造協働助成／2018年度

仙台雑煮を食べるアチェの子どもたち

アーティスト・イン・レジデンスの取り組み

陸前高田から広がる国際交流

国内外からアーティストを一定期間招へいし、滞在中の活動を支援するプログラムや仕組みのことをアーティスト・イン・レジデンス（AIR）と言います。陸前高田では、アートにより、地域の資源を活用して新たな価値を創造すること、東北を拠点としたアート事業とのネットワークを通じて人々の往来をつくり出す場を設けること、そして地域の人々の心の復興を実現することを目指し、AIRプログラムが行われてきました（主催：なつかしい未来創造株式会社）。

アーティストと地域との交流拠点となっているのは、陸前高田に2014年にオープンした宿泊施設『箱根山テラス』。外から訪れる人と地域の住民が、気兼ねなくおしゃべりをしたり、じっくりと学んだり、それぞれが思い思いの時間を過ごせるようにと、随所に工夫を凝らした施設です。日々変化を続ける陸前高田では、AIRプログラムを通して、地域とのつながりのなかで新たなアート作品が生み出され、豊かなコミュニティの形成を支える持続的なネットワークが育まれるなど、さまざまな成果が現れています。『国際交流基金アジアセンター』は、この取り組みから派生した、陸前高田とフィリピンにおけるプロジェクトに対して助成しています。

写真右上／2018年フィリピンでのプロジェクト。
写真下／AIR CAMP 2017 in 陸前高田での交流。

AIR CAMP 2017 in 陸前高田「生活と創造」
アーティスト・イン・レジデンス事業人材育成キャンプ&フォーラムアジア

北海道でAIR事業を展開する『NPO法人S-AIR』が陸前高田の団体と連携し、AIRの運営を始めたい、あるいは運営中の人々を対象に、AIR事業について学ぶフォーラムと合宿型のワークショップを実施。東南アジアや国内から講師を招き、「芸術活動を行いながら、どのように生活を創るか」について考察しました。

●主催／NPO法人 S-AIR
●期間／2017年9月22日～24日
●アジア・文化創造協働助成／2017年度

岩手県住田町の郷土芸能、行山流山口派柿内沢鹿踊とも交流。

フィリピンとの交流、人々の居場所を考える

マニラを拠点にアート活動を行う『Bliss Market Laboratory』が、陸前高田AIRと協働して実施したプロジェクト。自然災害や人為的にもたらされた災害のため居場所を失うという困難な状況について、陸前高田とマニラを比較し、住み慣れた土地に居られなくなるという逆境を乗り越えて生きようとする人々の状況について探求しました。居場所を失うことをめぐる異文化間の対話から共通性を見出すことで、被災地としての陸前高田とマニラのつながりについて考察しました。

●主催／ BLISS DESIGN STUDIO ●期間／ 2018年2月～7月
●アジア・文化創造協働助成／2017年度

写真上／展示会とシンポジウムのチラシ。写真左／セブ州の自治体カットモンでの視察。

三陸×アジア

地域を元気にするこころと文化の行き交い

発行日	2019年6月20日
編集	小久保よしの
	三澤範子（国際交流基金アジアセンター）
編集補助	近藤快
デザイン	中川深由希
表紙写真	井田裕基
巻頭・章扉写真	井田裕基、門傳一彦、田中健一
印刷	シナノ印刷株式会社
発行	独立行政法人国際交流基金アジアセンター
	文化事業第2チーム
	〒160-0004
	東京都新宿区四谷4-16-3
	TEL 03-5369-6025
	FAX 03-5369-6141
	https://jfac.jp

© 2019 The Japan Foundation Asia Center

著作権法上の例外を除き、本書に掲載の記事、写真、イラストの無断転載を禁じます。

ISBN978-4-87540-181-0

各プロジェクトの実現および本書の制作にご協力くださったすべての皆さまに、心より感謝いたします。